
I S（インフィニット・ストラトス）～激奏のイエローパフォーマー～

川喜多 瞳一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS（激奏のイエローパフォーマー）

【Nコード】

N7384P

【作者名】

川喜多 瞳一郎

【あらすじ】

女性にしか反応しないパワードスーツ「IS」。女尊男卑が当たり前前のそんな世界に住んでいるピッカピカの高校一年生、白砂崎（しろうさぎ）昂葉（こうは）は、十二月のある日不思議な男に出会う。

「来年、ISを使える男が現れる」

その一言で、昂葉の中で「不思議な男」から「変出者」にランクアップした男は続けてこう言ったのだ。

「お前も世界を変えないか？」

プロローグ

十二月。

「ふあーあ……くそう、あくびが止まらない……」

十二月。霜が田舎の土を持ち上げて、近所の子供たちがそれを掘り起こす季節。

「あー、仕送り今日だったな……寒い嫌だけど、しょうがないか……」

十二月。霜が田舎の土を持ち上げて、近所の子供たちがそれを掘り起こす季節。都会とは縁がないこの辺りでは、雪も降り始めてお山の木々を真っ白に染めている。

「うおおお……！さむ、寒い！ちちちクショオ！やっぱ田舎の学校になんて進学するんじゃないかな……ん？」

十二月。霜が田舎の土を持ち上げて、近所の子供たちがそれを掘り起こす季節。都会とは縁がないこの辺りでは、雪も降り始めてお山の木々を真っ白に染めている。そんな、寒冷の白に支配された田舎の朝六時。

「えっと……どちらさまで？」

そんな寒空の下、少年と男は出会った。

「少年、俺の事はいい。とりあえず、名前教えてくれないか？」

「ええ、えー……」

少年はそこで迷った。

間を開けて対峙する男の歳は、恐らく四十ほど。けれど、疲れきった表情が張り付いているその顔は、どこか若さを感じる。そして、微笑をたたえている男の後ろには、なにやら大きな荷物が一つ、黒い布を被せて置いてある。人間大のそれは横幅もなかなかあり、そしてゴツゴツしている。

怪しい。

「詮索するのは良いが、少年が名のらないと視覚以上の情報は得ら

れないぞ？」

「う……」

見破られていたのに対し、少年は諦めのため息をつく。

「白砂崎昂葉しつみけ しょうはです…」

「ふむ、白砂崎昂葉か。おめでとう、君は俺に選ばれた！」

ビツと指を指しながらそんな事を言う男に、昂葉はポカンと硬直する。

「え、あの、それはどういう……」

「来年の一月だ」

昂葉の言葉を遮るように男は言う。

「来年の一月、世界で初めてISを使える男が現れる」

「……………はい？」

「あの存在は大きい。女尊男卑の今の世界が崩れるきっかけとなる男だ」

男が言いだしたばかげた話に、昂葉は思わず笑ってしまう。

ISとは宇宙進出を目的としてとある天才によって創られた、いわゆるパワードスーツだ。しかしそれは、女しか扱えないと言う欠点がある。男には使えないのだ。

「あ、ISを動かせる男お？ははは！もしかして宗教ですか？」

「……少年。俺は神や仏を崇める宗教とは、丁度対立の側にいる人間だ。まあ、とりあえずこいつを見ろ」

男が荷物に掛けてあった黒幕を取る。その一瞬で、昂葉の笑い声が止む。口を開けたまま静止している。

その目線の先にはあるのは、黄色いカタマリ。中央には、人を誘うように穴が空いている。穴、では無い。席、コックピット。そんなものに見える。

「あい、えす……？」

その言葉を聞いて、男は唇を歪め、笑う。まるで悪魔のように。「お前も、世界を変えようとは思わないか？」

各種設定

主人公

名前…白砂崎昂葉
しろさき ほうは

好きなもの…かつこいいもの、音楽

嫌いなもの…ナルシスト

高校一年生。父親ゆずりのすばらしい運動神経で周囲を驚かせる。冬のある日不思議な男に出会い、生き方を百八十度まるまる変える事になる。運動神経以外はいたって普通だが、一人暮らしのためそこそこ料理が出来る。が、作れるだけで品そのものには知識が乏しい。音楽は洋楽だろうがJポップだろうがクラシックだろうが、なんでも聞く。性格も、大人しく洞察力に優れた、クラスメイトからは様々な局面で信頼されるタイプの人間であった。が、何の不運が祟ったのか、不思議な男に「君は選ばれた！」と言われたと思った。ISを譲渡されるわ人の手の掛かっている山奥に連れて行かれるわで性格が変貌。バカになってしまった。黒かった髪の色も何故か白になってしまう。女体に目が無いのは、しょうがの無いことだと自分で悟っている。

専用ISは『打倒し奏でる者』
ギター・ビート

名前…大御所
おおごしよ

好きなもの…楽しい事、今は亡き自分の恋人と友人と兄弟

嫌いなもの…期待が外れる事

見た目は中年の男だが、実は……。幾つになっても老いる事の無いイケメンで、その気になれば数秒で女性を落とせる。昔はもっと凄かったと、大御所の唯一生き残っている友人は語る。体の水分は七〇%では無く八〇%だという摩訶不思議な人物。幼いころの事件でそんな身体になったと言うが……。一騎当千どころか、一対三十億の戦争でも勝利できる実力の持ち主だが、今は「引退したから」というイマイチな理由で前線に出ようとしない。だが、そのことがあってか、各国のお偉いさんには睨みが利く。曰く、「俺の名を出したら国のトップは核シェルターの奥に引っ込んでしまう」とのこと。嘘か本当かは分からない。

生身でもISに勝てると、昂葉に豪語したらしい。

実は川喜多の最も好きなキャラです。付き合いが長いので、思い入れも深いです。

IS『ギター・ビート』

白砂崎昂葉のIS。

詳細な世代分類が出来ない機体。しかし書類上では第二世代となっている。

メインカラーの黄色に、所々白いラインが入っている。機動性に優れていて、攻撃力も平均以上であり、防御面は他のISと変わらない。『ギター・ビート』と言う楽器状の武器を使うため、アンプが両脚に一つずつと、背部の三つのスラスタにそれぞれ二つずつ

付いている。楽器を武器にしているというのがこの機体の最大の特徴である。

誰が作ったかは不明ではあるが、昂葉は知っているらしい。他にも秘密があるらしいが……

ウエポン

『ギター・ビート』

機体の名前の由来になっている。ヴァリアブルな武器で、奏でる演奏によって広範囲攻撃、防御等の効果が生まれる。殴って使う事は、ない。機体の各部位に設置されたアンプによって、効果範囲を増している。

『ピラミッド・ビット』

通称ピラビット。小型のビット兵器で、六機搭載されている。展開させる事で『ギター・ビート』の効果範囲を広げるアンプパーツとなる。もちろん射撃も可能。広げた所にレーザーを当てると反射する。

『ビーティング・バンカー』

パイルバンカー。どこかの『盾殺し』ほどの威力は無いが、レーザー刃なので連射が可能。そのまま剣として使う事も可能。

『クレイジー・ガトリングTwinS』

二丁の長大なガトリング。銃口が四つある、名に恥じないガトリングガン。三点の前方斜めを向いた銃口の中心に、正面を向いたものが一つと言ったバランス。クレイジーである。

『スィヒョウガ・アレンジ』

剣。青白く発光する不思議な細身の剣。ちゃんとした物理武器な

のに、伸びたりする。この世のものでは無い、未知の素材を使って
いる……らしい、が……ある意味本体よりも謎が多い。

第一話「トゥモロー・イズ」

『……白砂崎昂葉君が行方不明になってから既に六カ月が経ちます。警察は聞き込みの情報を再整理した後、再び大規模な捜索を行うと発表しており……』

駅前に構える巨大ショッピングモール『レゾナンス』。その一角を、二人の男女が並んで歩いている。

世界で唯一ISを使える男、織斑一夏とフランスの代表候補生、シャルロット・デュノアだ。

「なんか最近、物騒だよな」

電化製品売り場を通った際に聞こえたニュースの事を言っているのだろう。不意に一夏がそんな事を言う。

「そ、そうだね……」

対するシャルロットは、ずっとそわそわしている。恐らく一夏が今言った事は聞こえていなかっただろう。

「あー、その、シャル。今開けても良いんだぞ？」

「え？あ、ううん。ちゃんと部屋に戻ってから開けたいんだ」

「そ、そうか。それならいいんだ」

一夏が言っているのは、シャルロットが持っている小さい紙袋の事なのだろう。

実はこの日、一夏はこのショッピングモールに翌日の臨海学校に備えての買い物に来ており、それにシャルロットを誘ったのだ。それのお礼に、一夏はシャルロットにブレスレットをプレゼントしたのだが、それからどうもそわそわしている。

（うーん。しかし、こんなに喜んでくれるとは……）

そうと分かっていたら、もう少し高いものを買ってあげたのに……
……と思考する。現物は店内で選んだときに一度見ている筈なのだが、それでもまるで『欲しいものを買ってくれた時の子供』の様にずつとそわそわしているのだ。

ちなみに、少し前一夏はシャルロットに「トイレか?」と言ったところ、脛を蹴られている。

(あいつも、喜んでくれると良いんだけどな……)

一夏は手に持った袋の中にある、シャルロットの物とはまた違う紙袋を見やる。

今日は七月五日。そして明後日は、七月七日なのだ。



暗い部屋。何度来たって慣れそうに無い、不思議な場所。明かりが点いていないせいで部屋の輪郭は黒い闇に消され、無限の広さを感じさせるその部屋には、巨木の根が広がっている。いや違う、根では無くケーブルだ。無数のケーブルがこの暗い部屋に広がっているのだ。

そんな部屋に、一点だけ明かりの点いている所がある。そしてそこにお目当ての人がいるのだろう。

迷わずそこへ歩いて行く。部屋の床には何やら物がたくさん落ちていたが、もともと夜目が利く方だ。玩具の散らばっている子供部屋を歩くのと同じ要領で光源に近づいて行くと、カタカタツと何かを叩く音が聞こえてくる。この音はキーボードのものだ。と言う事は、この光は…。

「……よう。篠ノ之博士」

「ん? あー、君かー」

俺の挨拶に、篠ノ之束はキーボードを操作しながら返事をする。その顔はコンピュータの画面の光で青白く見える。いや、もともとそういう顔色なのかもしれないが。

篠ノ之束。ISを開発した張本人であり、そのISのコアを唯一製造できる人物。

そんな彼女が一体何をやっているのかと、コンピュータのディスプレイを覗いて見ると、大量のデータが画面を埋め尽くしている。

小さなウィンドウが幾つも開いたり閉じたりを繰り返し、画面中央の、恐らくメインだと思しきウィンドウもまた止まる事無く上へスクロールして行く。

（いや、違うな）

束の指の動きと画面のデータの動きには若干の誤差があるものの、ほとんど一致している。

この量のデータを、たった一人でさばいている。しかも速い。一見ただスクロールしている様に見えるが、実際はデータの誤差を発見、修復、情報の追加を、殆ど同時に行っているのだ。

（やっぱり天才ってか。俺にはこんな芸当は出来ないな、多分。しかし、このパターン…）

高速で修正、付加を繰り返すデータの文字列を目で追いかける。やはりそうか。

「ハッキングデータか。それも時限式。指定された時間になったら目標まで転送、自動解凍して一気に浸食ってどこか。こんな大仰なもの、国の軍事サーバにでも使わなきゃ能力が有り余っちゃうな」
「こういうのを見て冷静に解析する人なんて、ちーちゃん以外じゃ初めてだよー」

ちーちゃん：織斑千冬の事か。ISの世界大会『モンド・グロッソ』で総合優勝した、誰もが認める最強の人物。いつかは会って見たいものだ。

「しかし、篠ノ之博士。こんなもので税金の塊襲って、何するんだ？ 白騎士じゃあるまいし」

「んー、秘密だよー」

ふむ、やはりか。この人がそう簡単に目的を明かすはずが無いかな。

白騎士と言うのはISが世界に発展するきっかけとなった存在だ。簡単に説明してしまうと、篠ノ之束が世界全国の軍事施設にハッキングし、日本宛にミサイルを総発射。それを白騎士と呼ばれる第一号のISが、たった一機で全て墮としたのだ。確か、落としたミサ

イルの総数は二三四〇、いや二三四一だったか。

公式に篠ノ之束がハッキングした、と言う記録は無いが、俺の会
見ではそんな事できる奴は他にはいない。

今回もどうせその手のものなのだろうと、画面から目を離し暗が
りの部屋を見回す。

……あつた。

存外簡単に見つけられた。銀色のコンテナの様な物だ。大きさは
絶妙だ。どのように絶妙かと言うと、ISが一つ入る位の絶妙さだ。
「やっぱり、白騎士と同じ様なことやろうとしていたんだな。なん
だ、新型機か？前は白騎士だったから、今度は黒盗賊か？」

「やだなー、人聞きが悪いよ？でも、黒盗賊かぁ。なんだか悪い盗
賊みたいだねー。あ、でも盗賊ってもととも悪い人達なんだっけ？」

じゃあ黒盗賊はきつと良い人達なんだあ、と言う束の顔は笑って
いる。それは俺のギャグが面白かったからなのか、それともプログ
ラムがもうすぐ完成するからなのか。

そしてその顔を見ていて今気が付いたのだが、束は指でキーボー
ドを叩くだけで無く、目でも画面を画面を操作している。いわゆる
アイタツチと言うヤツだ。それで終始画面から目を離さない理由が
分かった。

まあ、『自分の家族と友達以外には興味がわからない』と言う彼女
の性格もあったのだろうが。

「そういえばさー、ここに何しに来たの？物盗り？」

「ん？あー、礼を言おうと思ってな。コアの製造方法を教えてもら
った」

「あれで良かったの？色々足りないモノとかあったと思うよー？」

「いや、大丈夫だった。俺を舐めてもらっちゃ困る。ああ言ったモ
ノには心当たりがあるし、それに……」

そこで言葉を切る。部屋にはキーボードを叩く、カタタツと言う
音だけが響く。他には何も無い。この部屋は、俺みたいだと思った。
「それに、俺には兄弟が居たしな」

それだけ言って、束を背にして歩く。

俺には兄弟が居た。でも、今はもういない。俺だけが残った。漠然とした、輪郭が空に溶けている程に抽象的な目的を掲げて、そこには意味が無いと知って居ながらも俺は進むのを止めない。やめたら、全部終わりだ。

第二話「モーニング・チェイス」

IS学園臨海学校当日。

寮に住んでいる第一学年の生徒達は連日よりも一時間ほど早く起き、前日の内に整えておいた荷物の再チェックなどをしてから、友達を起こしに隣の部屋へ赴いたりしている。

朝早くから寮を賑やかしている女子達の声聞いて、織斑一夏もまた目覚める。

IS学園とは平たく言ってしまえば、世界に一つしかないISの操縦者を養う機関のことだ。もともとISは女性にしか反応しないため、学園の構成員は一部を除いた99.9%が女性である。そして、残りの1%に当たる『男』というのが、この織斑一夏なのだ……何やら仰向けのまま腕と脚を大きく開いたり閉じたりしているが、気にしてはならない。

「ふう……今日は来ていないみたいだな」

そう言って彼はベッドから体を起こす。

実は先日、彼の部屋に無断で侵入及び添い寝を果たした女子が居るのだ。先週の話であり一夏も忘れかけていたのだが、寮じゅうに響く女子の声を聞いて一応の索敵をしたのだ。

「それにしても、みんな早いな。昨日遅くまで騒いでたから、てっきり寝坊するもんだと思ってたけど」

洗面所で顔を洗ってから、部屋の隅に置いてあるバッグの中身を確認してく。

臨海学校前日と言うことですっかり浮かれていたのだろう。昨晩は隣の部屋が騒がしく、一夏自身も眠りに就くまでに時間が掛かってしまったのだ。

少しすると、部屋の扉がノックされた。

「一夏、僕だけど……」

「ああ、シャルか。ちょっと待ってくれ」

一夏は屈めていた腰を伸ばし、扉へと向かう。

「あ、お、おはよう」

「おう、おはよう」

ふと、一夏の目がシャルロットの左手首に止まる。

「あ、それ」

昨日の買い物の帰りに、一夏がシャルロットにプレゼントした銀色のブレスレットだ。

「あ、せ、せっかく一夏が買ってくれたものだから……」

「そ、そうか」

「うん……」

「……………」

一夏は自分がプレゼントした物を、シャルロットがそこまで気に入ってくれている事に気恥かしさを覚え、沈黙してしまう。しかし、すぐに切り出す。

「その、どうしたんだ？ 朝から訪ねてきて」

「えっと、その……」

顔を赤らめ、歯切れが悪くなるシャルロット。言いにくい事なのか？ と一夏から声をかけようとした瞬間、シャルロットは思い切ったように言った。

「ぼ、僕と席、隣に座らない!？」

最後の方は声が上がりが気味だったが、一夏は気付かない。

「席？」

「あ、今日の、バスの」

「……ああ」

少し考えたのち、その意味を把握した一夏は、続けてこう言った。
「今日の臨海学校のバスの席か。いいぜ、別に」

「ほ、ほんと!？ 約束だからね!」

ずずい、と寄せられた顔に、彼は思わず一步下がってしまう。

「あ、ああ。でも、別に約束する必要無かったんじゃないのか？
バスの中で決めれば……」

「今じゃないとダメだからね、こういうのは。そうだ、一緒に校門に行こうよ。もう何人か行ってるみたいだし、早めにさ」

「おう、そうだな。じゃあ、俺が着替えてからシャルを迎えに行くよ」

「うん、わかった。それじゃ」

そう言ってシャルロットは一夏の部屋を後にし、一夏もまた部屋の中へと戻って行く。

学園の制服に着替えて、途中だった荷物確認を済ませると、彼もバッグを持って自分の部屋を後にする。

女子が、と言うより女子しかいない廊下を進んで行くと、一夏は何度か隣の席の誘いを受けたが、全て断って行く。

そしてシャルロットの部屋の前に立つ。と、丁度彼女が出てくる。

「あ」

「おう」

「早かったね」

「まあな。それじゃ行くか。えっと、ラウラは？」

ラウラと言うのはシャルロットと相部屋の女子の事だ。ドイツの代表候補生でもある彼女は人間面に問題があったのだが、シャルロットと同居するようになってから大分態度が柔らかくなってきてた。

「もうちょつと掛かりそうだった」

「待ってるか？」

「ううん。ラウラが先に行行ってて良いって」

「そっか」

そんなやり取りをして二人は校門へと向かう。

ホテルの様な外観をした寮を出た後、校門へ向かっていると、彼らはよく見知った顔を見つける。ツインテールがトレードマークの、中国の代表候補生、フアジンイン鳳鈴音だ。一夏の幼馴染でもある。

「おーい、鈴」

「ん？あ、一夏」

前方を歩いていた鈴に一夏が声を掛けると、彼女は止まって振り

返る。荷物はリュックサック一つだけと、かなり少ない。恐らく着替えしか入っていないのだろう。

「へえ、早いな。やっぱりお前も楽しみだったのか？ 臨海学校」

「バーカ、そんなワケ無いでしょ。早めに行かないとバスの席が無くなっちゃうから、仕方なくよ」

「おはよう、鈴」

「おはよう、シャルロット……て、なんであんた達一緒にいんの？」
ぎろりと鈴の目が一夏を睨みつける。

「い、いや、シャルが今朝一緒に……」

「い、一夏！」

「シャルロット、アンタまた一夏を……！」

「通行の邪魔だ、端に寄れ」

その声を聞いて一夏、シャルロット、鈴の三人は凍りつく。油の注されていないロボットよろしくギギギ、と三人が振り向くと、そこにいたのは……。

「お、織斑先生……」

「バスに乗るか道の端に寄るか、どちらかをしろ」

織斑千冬。IS学園の教師であり、一夏達のクラスの担任であり、現役から引退した身でありながら未だ衰える事の無い實力を持つ、名実ともに最強の人物。すでに分かっているとは思いが、厳しい。それもかなり。

「じ、じゃあ、鈴。また後でな？」

「そ、そうね。今回はまあ、見逃してあげるわ。それじゃ！」

言うや否や脱兎の如く駆けだし、既に来ていた二組のバスに乗り込んで行く鈴。ちなみに一夏達は一組なので、鈴とは違うバスに乗る。

「シャル、俺達も」

「うん」

鬼教師織斑千冬の雷が再び落ちないうちに、一夏とシャルロットもバスに乗り込むべく歩を進める。

一夏が先頭を譲り、シャルロットが先に乗車してから一夏が中に入ろうとした時だった。

「お、織斑先生え！」

「ん？」

一夏は、一組の副担任山田真耶が千冬に走り寄って来るのを見つけた。それ自体は珍しくない。よくある光景だ。だからこそ気になる。まだ生徒がぼつぼつとしか歩いていないこの時間帯に、わざわざ大声を張り上げて真耶は千冬を呼びとめたのだ。

何かがある。

そう思っ、一夏は聞き耳を立てる。

「……………きこう……りよか……せんよ……」

だが、やはり小声で話しているからか、ほとんど聞こえない。どこかで聞いたような名詞が入っている気もしたが、一夏にはそれが思い出せない。うーん、と悩んでいると、バスの中からシャルロットの呼ぶ声が聞こえて来たので、一夏は釈然としないままバスの中に乗り込んで行った。

第三話「アット・イレブン」

バスに乗って数時間、臨海学校の間泊まる事になっている『花月荘』に着く。

全員が各々の荷物を持って、バスを降りる為に席から立ち上がるうとした時だった。

「全員、そのまま着席している。私の合図があるまで立ち上がるな。いいな？」

千冬の有無を言わせない、そんな声が車内に響いた。

全員が、いきなりどうしたのだろうと訝しく思う中、千冬は生徒の返事を聞かないまま副担任の真耶を連れてバスから降りて行く。

「どうしたんでしょう、織斑先生」

一夏が座っている席の、廊下を挟んで隣に着いているブロンドの女子が言う。

セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生であり、一学年に
いる五人の専用機持ちの一人。長くウェーブのかかったブロンドの
髪は、良家のお嬢様を連想させてくれる。

その隣には銀髪のドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒも
いる。

一夏はセシリアの疑問を聞いて、頭の片隅に出発前の千冬と真耶
のやりとりを思い出すが、敢えて言わない。

「さあ？でも多分、旅館の人達に挨拶しに行ってるんじゃない？」

そう言いながら何気なく巡らした視線の先に、一夏は不思議なも
のを見つける。

「？どうしたの一夏…あ」

彼の隣、窓側に座っているシャルロットもまたすぐに気付く。そ
れは窓側の生徒から気付き始め、まるで水の波紋が広がる様に車内
へ広がって行く。そして、さすが99%が女子だけあってバスの
中はあつと言う間に騒々しくなる。

窓の外には千冬と真耶を含めた各クラスの担任と副担任が、

二人の男を囲んでいる。

一人は一夏たちと同じ位の歳、つまり高校生程で、髪が真っ白に染められている。頭に巻いている黄色のバンダナが不思議な存在感を放っている。

もう一人は四十位の、いわゆる中年の男で、若く見える顔に張り付いた疲れの表情は、一生払拭出来ないもののような印象を受ける。並んで立っているそんな二人の前に千冬が歩み出る。

「なあ、シャル。ここってIS学園の関係者以外立ち入り禁止じゃなかったか？」

「うん。だから先生たちが出てるんだと思うんだけど…」

窓の向こうでは千冬たちが何やら話しているが、何も聞こえない。一夏は一瞬、窓を開けて聞こうと思ったが、流石に自制をする。

と、話し合いが終わったのか、各クラスの担任たちが各々のバスへと戻って行き、今度は残った男二人同士が話し始めた。白髪の男に、中年の男が身振りを交えて何かを説明している様に見える。

「要件が済んだ。全員速やかにバスを降り、旅館前に整列しろ」

バス内に戻って来た千冬が、よく通る声で一組の生徒を誘導する。

「先生、あの人達は…」

「速やかにバスを降りろ。二度も同じ事を言わせるな」

突き放す様に言って、再び千冬はバスを降りて行く。

「……何か、機嫌悪そうだったね」

「そ、そうだな。とりあえず降りようぜ。また千冬姉……じゃない、織斑先生が来る前に」

シャルロットの声に軽く返事をしてから、一夏たちもバスから降りて行く。

「……？」

一夏はさりげなく先程の男二人が居た方を見てみたが、いない。

いつの間にか移動してしまっただろう。

「何をしている、馬鹿者」

「うお！？ちふ、じゃない、織斑先生！？す、すぐに並びますから！」

千冬に叩かれる前に、一夏は整列している女子の中へと加わって行く。

「よし。それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

千冬の言葉の後、全員がよろしくお願いしまーす、と挨拶をする。この旅館には毎年お世話になっているらしく、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀をする。

「はい、こちらこそ」

三十代ほどに見える女将は、しっかりとした大人の雰囲気を漂わせている。笑顔が絶えないその仕事柄のせいか、とても若々しく見える。

その後、唯一の男である一夏が女将に挨拶をした後、女将の合図で女子一同は旅館の中へと入って行く。一夏もその中に入って行くとした時、千冬からまた声を掛けられる。

「織斑、お前はこっちだ。ついてこい」

「あ、はい」

先程も述べたとおり、一夏は唯一の男だ。女子と同室させる訳にも行かず、だからと言って一人部屋にさせると、これまた女子が押し掛けて来るに違いないと言う事で一夏の部屋は決まっていなかったのだ。

千冬に誘導されて適度にエアコンの効いた廊下を歩いていると、やがて一つの部屋の前に止まる。周りにはそれ以外の扉が無く、つまり部屋がない。

（個室ならぬ孤室ってことか……？）

「……ここが、お前の部屋だ。多少、問題があるからな。何かあった時は私の部屋に來い。『教員室』と書かれた張り紙があるから、

すぐに分かるだろう。分かったな？」

「?はい」

なんだか珍しく歯切れの悪い千冬に、一夏は若干疑問の念を抱きながらも了解をする。それを聞くと千冬は、まだ仕事が残っていると言ってそこを離れて行った。

「……しかし、なんだか怖いな」

明らかに離れた所にある部屋。様子のおかしかった千冬。一夏は、背筋を何か冷たいものが通ったかの様な感覚に見舞われる。

（いや、いやいやいや！これは、きつと、そうだ！エアコンのせいなんだ！）

ええい！と腹を決めた一夏は、扉に手を掛ける。伸ばした右手の袖が捲れて、白いガントレットが覗く。彼の専用IS『白式』の待機形態だ。彼はオカルトなど信じてはいないが、『もしも』の事があった時には白式がある。そう思い、扉を、開け、

「グッドモーニン！おっはよう、イチカ・オリムーラ！」

「……………」

さつき見た、白髪の男が居た。しかも喋り方がおかしい。そして一夏は後悔をしていた。俺はどうしてあんなに恐怖感を覚えていたんだろう、と。

「あん？ワットハブン、どうしたんだイチカ。黙りこくっちゃって」
そしてそれは、湾曲にはあるが、見るからにチャライこの男を畏怖していたという事である。織斑一夏は、後悔をしていた。そして先程の千冬の言葉を思い出す。

『多少、問題があるからな。何かあった時は私の部屋に来い』
今すぐにでも姉の元へ駆け込もうと思ひ始める高校一年生男子が、そこにはいた。

一回の深呼吸をし、一夏は名も知らない白髪の男に自己紹介をする。

「お、俺の名前は、」「イチカ・オリムラだろう？アイノウザツツ、知ってるよ」

何か、色々と嫌になって来た一夏はそれでもめげず、今度は相手の名前を、

「マイネイムイズコウバ・シロザキ。おいの名前は白砂崎昂葉だ。よろしくう！」

ビツ、と親指を突き出したグーサインに、一夏は大きくため息をついて肩から荷物を下ろす。畳の敷いてある部屋はなかなか広く、一つだけある窓からは青い海が見える。晴天だ。

「えっと、昂葉、だっけ？ここって、IS学園の関係者以外立ち入り禁止になってる筈なんじゃ……」

初めて見た時から気になっていた疑問を口にする一夏。それに白髪の男、昂葉はニヤニヤしながら答える。

「んん？ユーオールレディセッドアアンサー。その答えは既に言ってるじゃん」

「え？」

「ここは、IS学園の関係者以外は立ち入る事が出来ない。ソウ。つまり……」

白砂崎昂葉は、学園の関係者。そしてそれが意味するのは、

「お前も、ISを……？」

「イエス。おいもISを使える」

ISを使える、二人目の男が現れた。そんなニュースは聞いた事がない。

一夏はシャルロットの事を思い出す。

彼女は最初『ISを使える二人目の男』としてIS学園に転入し、一夏に接近して彼のデータを収集すると言う任務を持っていた。現在はこちらと女として学園に籍を置いていて、任務は破棄しているのだが。

一夏が抱いた可能性は、ソレだ。彼女の時も『二人目のISを使える男』だという設定だったのに、ニュースにはなっていないかった。

「……お前は本当におと」「オフコース。おいはもちろん男だ、が……証明する方法が一つしかないな」

遮るようにそう言いながら昂葉は既に自分のズボンへと手を掛けている。

「いや、いい、わかったら、頼む、脱ぐのは止めてくれ」

対する一夏はたまらないので、必死の制止をする。

そんな必死の制止が面白かったのか、昂葉は大声を上げて笑う。

H A H A H A という高笑いではなく、普通に笑っている。

(ああ……なんか、頭が……)

完全に先を読まれていて、口調は独特。行動も大胆であり、飄々としている。口では絶対に勝てそうに無い相手である。細い腕を見て、喧嘩なら勝てそうだと思うが、どこか裏を感じる。

「イチカ、アーユーオーケー？大丈夫か？せっかく海に来たんだ、泳いでくると良い。気温も丁度いいし、海はきれいだし、気持ちいいぞ？」

それに『真夏の太陽』がマァックス！と付け加える。

一夏はそれもそうかと、荷物から水着の入っているリュックサックを取り出す。着替えは部屋ではなく、ちゃんとした更衣室です。それがマナーというものだ。

「えっと……昂葉は行くのか？」

「オウ、気遣ってくれるのか、イチカ。バットアイムオーケー。おいは大丈夫だ。水着のガールズと遊んで来い」

ニヤニヤと笑っているが、目が違う。『何も聞くな。何も考えずに遊んで来い』と言う強制力のある目だ。

分かった、と言って一夏は部屋を後にする。

「……………」

残った昂葉はあぐらをかいていた脚を伸ばし、ふうと溜め息をつく。

「大御所。やっぱり俺これキャラがおか」「おかしくない。必然だ。それより、織斑一夏はどうだ？」

昂葉の独り言を遮るように、どこからか声が聞こえる。しかし昂葉は、元々その声の持ち主に問いかけたのか、何も無かったかのよう言葉を続ける。

「面白いよ。言葉にしないで、頭の中では結構面白い事言ってる。下らないものも含めてね」

「はたから見て、何を考えているかは筒抜けだな。まあ、時間をかけてみる事だ」

「大御所は昔、町内一強い不良と喧嘩して傘下に入れたんでしょ？ やっぱりその時も時間かけたりしたの？」

「いんや、向こうから吹っかけて来たんだ。三日と無かったな。良い奴だったよ」

だった。過去形。

「あー、ごめん、大御所」

「いや、いい。過ぎた事だ。それに、俺が悪い。俺がもっとしっかりしていれば良かった」

「……大御所。俺はこういう時どういう反応すればいいんだ？」

「黙って聞いてりゃいいんだよ。さてと、俺はそろそろ行く。見に行かなくちゃいけない連中が居てな」

よいしょ、と今まで座っていたのか、立ち上がる掛け声の様なものを昂葉の耳に残して、その声は別れを告げた。

「さあてと。久々の腕試しだ」

第四話「サマーズ・サン」

篠ノ之束　が　あらわれた！

それもニンジンの中から。

そんな奇想天外にして破天荒なものを見せつけられたのは、一夏とセシリアだ。つい先ほどまでは、一夏の幼馴染であり篠ノ之束の妹である篠ノ之箒が彼と一緒に居たのだが、箒と入れ替えにセシリアがやって来たのだ。

ニンジンの中から現れたと言ってはいるが、もちろん食用の物ではない。人が一人は入れるくらいの大きさの、イラストチックにデフォルメされたニンジンだ。

（この人は普通に登場するという事を知らないだろうか……）

一夏があきれているのに、気付いたのかそうでないのか束は説明をする。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

不思議の国のアリスの様な青と白のワンピースを着ている束は、一夏が諸事情で持っているウサミミを受け取ってそれを装着する。一人不思議の国のアリスだろうか。未だに束のファッションセンスを理解した人はいない。

「お、お久しぶりです。束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいっくん。箒ちゃんはどこかな？ さっきまで一緒だったよね？ トイレ？」

「えーと……」

箒がどこかに行ってしまったのは、箒さんの気配を悟ったからだ。しかしそれを正直に言える一夏ではないので、答えに迷ってしまう。「まあ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあねいっくん。また後でね！」

そう言って束は走り去って行く。因みにその探知機というのはウサミミの事らしく、その先端が箒の方へと向いていた。

残ったのはセシリアと一夏の二人だ。

「い、一夏さん？ 今の方は一体……」

「束さん。箒の姉さんだ」

「え……？」

一瞬キョトンとしたセシリアだが、すぐにそれが何を意味しているのかに気付く。

「ええええっ！？ い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？ 現在、行方不明で各国が探し続けている、あの……！」

「そう、その篠ノ之束さん」

しかし、今現在ここはIS学園の関係者以外は一切立ち入ってはならない領域となっている。だというのに白砂崎昂葉といい、篠ノ之束といい、今日はなんだか部外者の侵入が多い。ただ、嘘か本当か、前者は一応学園の関係者と言う事らしいが。

「……なあ、セシリア」

「あ、はい？」

「その……ああ、いや」

部屋であった事を話そうと思ったが、上手くまとまらず、結局一夏は関係無い事を聞く。

「俺はこれから海に行くけど、セシリアは？」

「え、ええ、わたくしも海へ。そ、そこですね……」

「……真夏の太陽が、マックス……」

一夏は部屋で昂葉が言っていた事をそのまま口にする。

確かに太陽はサンサンとその姿を青い空に輝かせている。が、昂葉の言った太陽とはその事ではなかった。天照大神でもアポロンでも無い。

砂浜や海で活発そうにきゃいきゃい言ってる、女子達だ。

皆色とりどりの水着を着けていて、確かに七月の太陽より眩しい。しかし見とれている訳にもいけないので、とりあえず一夏は準備運動を始める。久しぶりの海水浴で溺れたりしたら面子がたたない。腕を伸ばし脚を伸ばし背筋を伸ばしていると、

「い、ち、かゝゝゝっ！」

おう？と一夏は振り返ろうとすると、ガクンッとその体が前のめる。

「あんた真面目ねえ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら、終わってたんなら泳ぐわよ」

突然彼に飛び乗ってきたのは鈴だった。小学校の時も中学校の時も、彼女は水着になると一夏に飛び付く。

（相変わらず、猫みたいなやつだよなあ……）

「こらこら、お前もちゃんと準備運動しろって。溺れてもしらねえぞ」

「あたしが溺れたことなんかないわよ。前世は人魚ね、たぶん」

そんな事を言いながら鈴は一夏の体を駆け上って、肩車の耐性になる。一夏が心中で、鈴の前世は猫か猿のどちらかだ、などと思っている事は言わずもがなである。

「おー高い高い。遠くまでよく見えていいわ。ちよっとした監視塔になれるわね、一夏」

なるほど。今は就職難だから、それも良いかもしれないと思う一夏は、すぐに問題点に気付きツツコミを入れる。

「監視員じゃ無くて監視塔かよ！」

あけっぱなしの窓から、青い海と白い砂浜と、マアックスな真夏の太陽をみる。眩しい。だが、このためにサングラスを持ってきたのだ。すかさず装着。

「あーあ。やっぱり俺も海行きゃあ良かった……」
今さら後悔しても遅いか。

旅館の前でクラス担任達と大御所が話しあっている時、バスの中からめちゃくちゃ注目されている事は気付いていた。あの目線に攻撃力があつたら、RPGのラスボスだって四回は死ねるくらいの注目を集めていた筈だ。なにせ、IS学園の臨海学校の舞台に男が二人もいたんだ。誰だって気になるだろう。それに俺はともかく、大御所は男の目から見ても上の上のルックスの持ち主だ。中年のおっさん、本当の年齢ばらしていいか？

とにかく、そんなアンノウンな存在である俺がいきなり海に参上したら……悪くは無いが、困るのは大御所だ。そもそも後悔云々の話ではない。

「つと、うん？ありゃイチカでねえか」

先述の理由で声は掛けない。

一夏の肩の上にはツインテールの女子がいて、その前にいる金髪の令嬢みたいな人と何やら言いあっている。三角関係か。うらやまし……うん？おおう！一夏の周りに女子がすんげえ集まってる。

(三角じゃ無かった!!)

ハーレムとか言うものを初めて見たぜ。

俺もあなるのか。悪くはない、悪くはないぞおっ！……あれ、ツインテールのアジア人が一夏から降りた。なんだか金髪の令嬢に勝ち誇ったように何かを言っているが。

「ううむ、聞こえない……」

どうしよう、『アレ』を使おうか。バレたらただじゃあすまいよな……いや、大丈夫か。

頭のバンダナに手を当てて、目を瞑る。キーン……と小さく金属音が鳴ったのを合図に、耳が遠くの音も拾い始める。

『……どうせセシリアだって一夏になにかしてもらうんでしょ？じゃあいいじゃん。ねえ？』

『いえ、それは……』

『え、何してもらわないんだ。じゃ、あたしが――』

『し、してもらいますっ！一夏さん、さっそくサンオイルを塗って

ください!』

「ぶっ!？」

サンオイルを、塗る!？つまり一夏はあの金髪美人の御背中をあのまま見る事であってしかも直接接触すると、そう言う事か……!

(イチカめ、なかなかやりおる)

でもまあ、如何にも鈍感そうな顔をしていたからな。それに金髪の令嬢――セシリアって呼ばれていたな――の口ぶりから、もともと約束していたんだろう。一夏め、後の事あまり考えずに引き受けたんだな。

とか独りで連想ゲームしている間に、もうパラソル差して準備に入ってら。死角になって良く見えんし。

「おい、昂葉、おじいちゃんが帰ったぞお」

「んー? ああ、はい……って、大御所!？早くねーか? 帰ってくるの」

今度はちゃんと部屋に入ってきていて、俺の隣から海を眺める形に座る。三十分くらい前に出て行ったばかりなのに、早い。

「腕試しは終わったの？」

「ああ……あっけなかった。まさか二発で終わる程度だったとはな……」

手の中で何やら小さな瓶を弄っている大御所の顔は、本当に残念そうだ。

「この際思い切って聞いちゃうけどさ、『腕試し』って俺と同じような立場の人間が他にもいるってことなの？」

パラソルの死角に隠れて、一夏とセシリア嬢が一体何をやっているのかを気にしながら聞いてみる。大御所も俺と同じ点を見ているようだ。

これまでも大御所が『腕試し』と言って出かけて行くのは何度かあった。でもその相手が誰なのか全く聞いたことが無い。

「お前は……って言うか、お前が違うんだよ。俺は今お前を含めて六人を見ているが、その誰もが俺とは全く関係の無い人間なのに対

して、お前だけは違うんだ」

「……つまり、『俺と』同じ立場なんじゃなくて、『俺が』違う立場なのか」

「御名答。流石は俺の……ん？おい」

「分かってるよ、大御所」

ツインテールのアジア人がパラソルの中に入って行ったと思ったら、五秒もしないうちに一夏を連れて海へと連れ走って行く。セシリア嬢は何故か追いかけていけない。

「パラソルが邪魔で見えないな……昂葉、連想ゲームだ」

「あのツインテールのアジア人とパラソルの向こうの令嬢——セシリア嬢——は中が悪そうだった。セシリア嬢はイチカに、パラソルの向こうでサンオイルを塗ってもらっていた……ツインテールのアジア少女はセシリア嬢のサンオイル塗りを邪魔して、イチカを連れ去った」

「ならば、そのセシリア嬢とやらが追いかけていけないのは？」

「オイルを塗り終えたから……は無いな。サンオイルを塗ってもらっていたんだ。当然その間はビキニの紐を外すから、それがアクシデントの元になったのかも……」

正解、と大御所が言うのを尻目に聞いて、太陽が輝く七月の海の鑑賞を続ける。

聞こえるのは海の波の音に、風の音と、きゃあきゃあと言う女子の高い声。俺は今、青春をしている……気がする。高校一年生をやっていた去年はこんなじゃ無かったから、新鮮だ。今年もまた一年生をやる事になってしまったのだけど。

「大御所」

「うん？」

「そう言えな——って。俺さ——大分簡単に転入できたよね」

「俺の力を甘く見るなよ。今はもう現役を引退したが、昔はたったの一人で日本列島を掌握できるくらい力の持っていたんだ」

流石大御所。見事に『謙遜』している。自身への評価が、実際よ

りも低くなるのが大御所だ。全盛期はユーラシア大陸だって物にできる程だったって、大御所の古くからの知り合いに聞いている。

その通り名は確か――、

「おいおい、溺れたぞ、あのツインテール」

「愉快そうにいわないでよ、『渡りの悪魔』さん」

「あ、ったく。誰に聞いたかは知らねえが、人前でその名を口にするなよ。お偉方の前でそれを言ったが最後、相手は核シェルターの奥に引っ込みよう」

「何やったんだよ大御所……」

ほほ笑む中年の男を見てから海に視線を戻すと、一夏がツインテールになっていた。いや、違う。ツインテールのアジア人を背負いながら泳いでいるせいでそう見えただけだ。なかなか器用な事をしてみせている。

「長くなりそうだな……」

何を指して言ったのかは知らないが、大御所は楽しそうな表情を浮かべていた。人が溺れかけたという事故があったばかりの海を、楽しそうに見つめて。

俺の存在が公になるのは、今夜の夕食だったか。
確かにそれまでは、長いな。

第五話「宴会場はほとんど女」

「……全員揃ってるな。食事の前に、お前たちに紹介しておかなくてはならない者がいる」

大広間を三つつなげた大宴会場に響く織斑千冬の声が、襖越しでも聞こえる。

十一時だったあの時から、既に過ぎる事八時間。つまり七時。大御所は一時間くらい前にどこかへ行って、もとい帰ってしまった。

今俺がいる広間前の廊下は暗く、光源は襖と襖の間から漏れる宴会場の光のみだ。その襖の間から宴会場の中を覗いてみると、百を超える浴衣を着た女子が、千冬の声に耳を傾けていた。このシチュエーションは、なんだかスパイ活動をやっているみたいで燃える。

「……なんか、緊張してきた」

ちゃっちゃと済ませばどうってことない、とか思っていたけど、いざとなればそれが相当に難しい事なのだと気付く。何せ全クラス女子の前で自己紹介って、何言えば良いんだよ。昼の海水浴観察で全員が日本語を理解できると言うのは分かっている。各国語で一々挨拶をし直さなくてはならないと言う、最大の懸念が晴れて良かった。だが、幾ら言葉が通じるからって小粋なジョークが通じるかどうかまでは分からない。

（じゃあ、ジョークは全て消去して、俺のパラメータだけ淡々と語れば良いと……いやいや、それじゃ『つまらないヤツ』のレッテルを貼られて……）

「白砂崎、入れ」

「……………」

IS学園一年一組担任、織斑千冬の冷たい声が聞こえてくる。熱っぽかったら、それはそれで怖いけど。

まだ頭の中の紹介文が纏まって無いんでちょっと待ってください、なんて言った数瞬後には三途の川を渡っていそうだから言わないで

おこう。

腹を決めて、襖を横にスライドさせる。会場の明かりに一瞬だけ目をしかめるが、一秒もしない内に慣れる。会場内は、コソコソ話は聞こえるものの、思ったよりは静かだ。俺なんかじゃなくて、大御所が入ってきてたら皆狂喜していたんだろうな。あの人は男の俺から見ても上の以下同文。

背中を向かい合わせて座っている女子と女子の間を歩いて行き、千冬の隣に立つ。今まで大御所に連れられて、様々な国の絶景と呼ばれるスポットを渡り歩いたが、一度にこんなに多くの女子を見たのは初めてだ。

「えー、この合宿中から諸君と学園生活を共にする事になった、白砂崎昂葉だ」

うおう、睨まないで下さいよ、挨拶しますから。

んで、えっと、キャラ作りキャラ作り。

スーッ、と深呼吸をして、ビッと右手とその人差し指を突き出す。「グッ、イヴニン！こんばんわぁ、ミナサン！おいの名前はコウバ・シロザキだ！以後お見知り置きを求むぜ！」

元気よく言ったのに対して、会場内はシーンとしている。視界の端には、千冬が明後日を見ている。呆れているんだと悟ってみせた。ヤバい。恥ずかしい。

俺にこんなキャラを強制した大御所は、きっと頭のネジがお花と入れ替わってるんだ。緩んできるとか抜けてるとかの次元じゃない……気がする。

っと、いつまで俺は人差し指を突き出したままんだ。直立に体勢を直さなくては。

「お前……」

ビシッ！

「イチカ☆オリムーラ！」

やべえ、俺とした事がポーズをとりなおした揚句、ヤツの名前をテンション・オブ・ハイで叫んじまったぜ！立ちあがった一夏が若

干引いているのが惜しい。そこは堂々としていくれ。しかし、なんだ、八時間ぶりか。大御所と別れるときにちよつと海まで送ったかな。一夏の着ている浴衣は、俺がいなかったそのほんのちよつとの間に調達したんだな。まあ、そんな事は俺が浴衣に着替えた時に気付いたのだけど。

そこで、千冬の咳払いが聞こえた。

「白砂崎。挨拶が済んだのなら、さっさと適当な位置に着け」

「バット。でももう座る所がないんだけ……ですけど」

溜め口が使えない！使ったらどうなるかは、千冬の俺を見る目が語っている。

「それなら、そうだな。せっかくだ、織斑の向かいに座ると良い」

「え……えーっ！!?」

一夏の向かいに座っている女子が、なんか驚愕している。きつと、激しい戦鬪の末獲得した榮譽のある席なんだろう。そして、織斑先生の言いたい事も理解しているのだろう。

「うるさい、四の五の言うな。返事は？」

「う……はい……」

有無を言わせない口調にその女子は自分の膳を持って、奥に見えるテーブル席へと行った。

IS学園には、各国から生徒が入学しに来ている。宴会場は座敷なので、当然正座をしなければならないが、他国の生徒はそれが出来ない場合があるのだろう。そういう生徒達のためにテーブル席があるらしい。

（なんか、悪いことしたかな）

俺がテーブル席に行けば良かったのだけど、今さら変更は俺が嫌だ！様子見の今の段階では、可能な限り一夏の近くにいた方が都合が良い。

千冬——織斑先生に言われる前に一夏の前に着くと、女将さんが俺の前に膳を持って来た。料理は刺身に小鍋、山菜の和え物が二種類、赤だし味噌汁にお新香か。

料理から目を離し、正面の一夏を見ると目が合う。怪しむような目つきの一夏の右隣には、昼の海で一夏と一緒にビーチバレーをやっていたシャルとか言う金髪の人。本名は多分シャルロットだと思う。左には苦悶の表情を浮かべるセシリア嬢がおわせられる。両手に花か。

男は近くに女が一人でもいると、無意識の内に素を隠す。俺の任務上、それは不都合だが……

（でもま、俺は意地でもこの男の『素』を知らなくてはならないのだけど）

最初は微妙な空気で食べ始めた一同だったが、五分もしない内に騒がしくなり、今はもう最初から何もなかったが如しの様子で食べ始めている。

かく言う俺は、なんだか周囲から凄い好奇の視線を送られている。せめてそれを言葉にして欲しい。

前にいるシャルロットと一夏はなんだかいちゃいちゃしているし。セシリア嬢の様子に、果たして気が付いているのだろうか。

「つて、おいおいおい！」

「あ……」

「ん？……っ~~~~~~~~！！！」

シャルロット殿、わさびの山を食いやがった。目が赤くなって、辛味と言う名の痛覚刺激に、今にも泣き出しそうになるのを我慢しているのが良く分かる。

「だ、大丈夫か？」

一夏がそんなシャルロットに声を掛ける。なんて言うか、彼氏彼女の関係に見えてしょうがない。でも、付き合っでは……いないんだろうな。じゃなけりゃ、他の女子が露骨に一夏を落とそうと躍起になる筈がない。

「ら、らいひょうぶ……」

対するシャルロットの返事は、どう考えても大丈夫そうじゃ無い上に、ほほ笑むその顔が涙目に崩れていまいち決まっていけない。

「ふ、風味があつて、いいね……。お、おいしい……。よ？」

わさび食って何が美味いんだか良く分からない俺がいる。しかし流れから察するに、このわさびは上物らしい。ううむ、俺も料理とか勉強すればよかったな。とか、わさびを箸でつつきながら思ってみたり。

そこで一夏がセシリア嬢に気付く。なんだかさつきより悪化してる様に見えるのは、きつと気の所為じゃないのだろう。セシリア嬢の髪色から、きつと正座とは無縁の地に住んでいた事がうかがい知れる……。正座と縁のある国が日本しかないのだけど。

「セシリア、正座が無理ならテーブル席の方に移動したらどうだ？うちのクラスでも何人か行ってるし、別に恥ずかしくないだろ」

「へ、平気ですわ……。この席を獲得するのにかかった労力に比べれば、このくらい……。」

あー、やっぱり血で血を洗うすんげえ闘いがあつたんだな。俺の目に前にいる『世界を変える男』は、なんだか頭を傾いでいるけど。「あ、ところでさ、今思い出したんだが……」

急に一夏が俺に会話を振って来た。まあ、いつかは来るだろうと思ってたから、たいして驚かない。口元まで上げていた味噌汁のお椀を下ろしながら「ワット。何？」と聞き返す。英文を会話の中に混ぜるのは面倒くさい。大御所が言わなければ俺は絶対にやっていない。

「お前の名前、白砂崎だよな。最近行方不明になっている白砂崎って男と、なんか関係あるのか？」

隣で苦しんでいるセシリア嬢とシャルロットの動きが止まる。話を盗み聞きしていたであろう、周囲の女子もまた同じく。

この話題には驚かない。しかし、あのニュースの内容を思い出すとは、この男は中々良い記憶能力の持ち主のようだ。

「イエス。確かにおいはあの白砂崎と関係がある……。つうか、本人

だけど？」

隠す必要もないのでありのままを話すと、聞いた本人がなんだか面食らったような表情になる。否定されると思っていたんだろうか。それとも、ただ単に返事の返し方が分からないとか。

「あ、あの、どうして行方不明だった白砂崎君がIS学園に……？」シャルロットが聞いてくる。下の名前で良いよ、なんて一昔流行った主人公のような事は言わない。女子に下の名前で呼ばれるって、俺も健全な男子高校生なんだから、誤解しちゃうだろ。

だが、どうして、か。ここに来た理由をバカ正直に話してしまつたら、大御所に畳まれるに決まっている。適当な誤魔化し文句は無いだろうか……。右上を見ながら考えてると、最低だが良い案を思いつく。ついでだ、一夏も巻き込んでみよう。

「アクチュアリー。実はおいと一夏は二人一組で、日本の少子化問題に取り組むがために女の園であるここ、IS学園に入学したのだ」「な……っ！」

ピシッ、と周囲が凍りつく。俺と一夏を見る目が、明らかに変わった。

「い、いや、違うんだ！みんな、聞いてくれ！ああ、白砂崎もなんとか言ってくれよ！」

「ノンノン。おいが自分で言った事を、簡単に否定はしちゃいかんのよ」

右手に持った箸を天井に向けて、人差し指の代わりにくるくる回す。

「一夏って、今まで僕達の事そういう目で見てたんだ……」

「なんだか、少し見損ないましたわ……」

「だっ、だから！」

……なんて言うか、思ったより本格的に壊れ始めている。これがきっかけで、病まなければ良いんだが。

波乱と混沌に満ちた夕食は解散時間まで続き、女子達が次々に風呂に入っていく気配を、他の部屋とは離れた孤室に寝そべりながら

感じ取る。

木造の天井には不気味な模様なんかは一切なくて、どこかつまらない。大御所は来ないだろうか、と部屋の扉に目をくれてやるが、人の気配は当然の如くしない。そもそもあの人に『人の気配』を期待する方がおかしいのだけど。一夏は、食事の後にふらふらとどこかへ出かけてしまった。きっと女子の入浴を覗いているんだな、とか思わない。決まった時間にならなければ男子は一切入れないこの旅館の風呂を、あの一夏が覗くだなどとはなかなか想像しがたいからだ。

俺も昔は良く、女子の風呂を除く手段を悪友達と共に模索したものだ。成功したためしは一度もないが、あの興奮は青春時代を明るく照らすのに絶対に必要な物だ。他の何とも代えられないあの瞬間を、もう一度味わえる日は来るのだろうか……。

第六話「ナイト・トゥ・モーニング」

なんという事であろうか、あの後大御所は現れなかったのだ！

……なんというか、自分で言っていて恥ずかしくなる台詞だ。芝居掛けてみようと思ったら、何故かこんな事になってしまった次第だ。昔の人たちは、こんな言葉遣いを平気でしていたのだから凄い。

話を戻して、何故あんな事を言ったのかと言うと、時刻は現在十二時。消灯時間を超えて、旅館全体が静かになっている。俺と一夏は平行に敷かれた布団に寝て、共に暗い天井を見ている。ちなみにこの男、夕食の宴会場で別れたきり一度も姿を見せず、弧室に戻ってきたのは消灯時間ギリギリだった。この時敗北感が胸に染みたのは、何故だろう。

一時間前、一夏が部屋に戻って布団を敷いた時は、女子の話し声が聞こえて寝られないだろうな、と二人して夕方を括って布団に入ったのだが、先程から言ってる通りここは『弧室』。他の部屋とは離れているがために、聞こえるのは微かな海の波の音だ。

「ヘイ、イチカ。起きてるか？」

組んだ手の上に頭を乗せながら静かに言うと、返事は意外に早く返って来た。

「ああ、起きてる」

寝てるー、みたいなベタな反応はしないのか。正直者め。その正直さを、どこまで貫けるかな？

「イチカ、ウェアアユーウェント。さっきまで何処に行ってたんだ？」

「……道に迷ってた」

嘘だッ！！っていう名台詞を叩きつけたかったが、夜中なので自制する。しかし正直者を辞めるの早いな。本当はどこに行ってたかくらいは分かっているけれども、ここは是非とも本人の口から聞き出したい。

「ノンノン。嘘はいけねえなあ、イチカ」

「なんで？」

「ウェンユアーケイムバック。お前が返って来た時、女モノの香水がプンプン匂ってたぞ？道に迷ったってのが本当なら、お前には『そっち方面』の趣味があったって事になる」

「……………」

この暗闇の中、相手の顔は見えずとも、苦い顔をしていると言うのは容易に想像出来てしまう。

「白砂崎……お前、本当は全部知ってたりするの？」

「ノー。だから、今から推理する」

目を瞑って、考えている旨を伝えるべく、えーと、と小さく声に出してから暴露ショーを始める。英文は……いいや。面倒くさい。ここは抜いても大丈夫だろう。大御所は聞いていなだろうし。

「それじゃ、イチカが今まで行っていた場所か。候補が沢山ありすぎるな。でもまあ、推理の鍵は『女モノの香水』と『就寝時間ギリギリの帰還』と言ったところかな？まずこの旅館内の現状から、女の部屋に行った、と言うのが妥当だ。でなけりゃ、女モノの香水が服に着く筈がない。お前に女装趣味があると言う可能性は、就寝時間ギリギリに返って来た、という点で抹消」

もし仮に一夏に女装趣味があったら、必ず人目の付かない所に行く。人目の付かないところには時計なんか置かないので、時間ギリギリに帰ってこれる筈がない。腕時計は一夏はしていないし、浴衣では携帯電話は持ち歩けないから、その手で時間を確認したと言うのは無し。第一に、服を入れるためのカバンを持ち歩いていない。

「夜の海に繰り出した、と言う可能性も同じ理由で抹消だ」

「なんか、本格的だな……」

「当たり前だのクラッカー。次に、『誰の部屋に行っていたか』だ。これは難しい。大御所に無駄に推理力を鍛えられた俺でも難航しそうだ。

「えーっと、女子の香水だな。あの時間内、風呂の時間だったよな

？風呂上がりには香水を着ける様な優雅な人は、セシリア嬢くらいしか思い当たらない。だから、俺の先入観で、お前はセシリア嬢と一緒にいた事になる」

えー、とか普通に聞こえてきそうな俺の推理に、しかし一夏は何も言わない。もしかして当たりを引いたかな。

「女子と仲良くしていたのに就寝時間ギリギリに帰って来た、と言う事は、先生がそこに入ったからだ。副担の山田真耶は場の雰囲気を押されて、お前を拉致して返そうとしなくなるだろうから、介入したのは織斑先生だろう……そういえば、織斑先生はお前の姉だったな、イチカ」

そこまで自分で言って、閃いた。そうか、そう言う事か。

「オウオウオウ！イチカ！お前姉の部屋に行ったなー！？」

「ぐ……」

バサツ、と音がしたから、布団の奥に入り込んだんだろう。どうやら当たったようだ。

さしずめ、一夏は姉の千冬に、『私の部屋に来ても良いぞ』的なお言葉を頂戴たのだろう。俺の突然の来訪に混乱した一夏は姉の部屋へ。そこに昼のビーチで起こった事を詫びる為に、セシリア嬢も呼んだのだろう。

あっはは。クソ羨ましい。

二日目は、丸々IS稼働の稼働試験に費やされる。初日の完全自由日は、この日があるからこそなのだろう。しかし、天国の後に地獄と言うのは中々精神的に参る。特に専用機持ちは本国から大量の装備が届いているから、洒落にならない忙しさだとか。

ちなみに今は、ラウラとか言った名前の女子が遅刻してきて、織斑先生から罰を受けている。いつもは真面目な生徒らしく、彼女が遅れて来た事についてはクラスの全員が驚いていた。

(……あれ？どっかで見たと思ったら、昨日の昼の海で一夏にラン

ジェリーアタックをしかけていた人だ)

正確にはランジェリーじゃなくて、ランジェリーに見えるビキニだったけど。あれは結構きわどかった。俺にもあんな風に大胆にアタックして来てくれる女子は現れないだろうか。

そんな女子の罰(ISのコアについての説明。凄い専門用語の嵐で、聞いてなかった)が終わると、織斑先生が声を上げる。

「それでは各班ごとに振り分けられたISの装備実験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はい、と一同が返事をする。一学年全員が並んでいるだけあって、かなりの人数だ。場所も特殊で、崖に囲まれている形になっているから、なんだか秘密のビーチめいていて映画のロケーションみたいだ。

その中で、水着にしか見えないISスーツに身を包んだ女子達が、最先端の科学の塊ことISの装備やら本体を運んでいるのはシュールだ。

目だけ動かして辺りを観察していると、突然織斑先生の声が聞こえる。篠ノ之とか言う名前の女子を呼んだらしい。俺を呼んでいると言う訳ではないので、気にせず一夏を弄りに場を動かこうとする。その時だった。

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

ズドドドド……!と地鳴りの様な音を立てながら、なにやら人影がこちらに迫ってきている。……普通に走っただけじゃあんな風に砂煙は立たないから、何か着けているんだろうか。

「……束」

織斑先生が小さくそう言うのを聞こえた。あれ、この臨海学校は関係者以外は立ち入りが禁止されてるんじゃない……俺と大御所が言えた義理じゃないな。しかし、あれがISを創った天才、篠ノ之束か。大御所は何度も会っていたと言うが、俺は見るのすら初めてだ。そういう大御所、今何をやっているんだろう。今朝も顔を見せなかった。もしかして、例の『腕試し』とか言うヤツで返り討ちにされた

とか……それは無いな。

「ぶへっ」

「うるさいぞ、束」

おお、織斑先生のアイアンクロウが炸裂う！これは決まっ、決ま、ああーっ！束さん織斑先生のアイアンクロウから抜け出すー！……性格の根本が、大御所のキャラ作りに侵食され始めている気がする。しかしあれから抜け出すとは、本当に凄い。

「え、えっと、この合宿では関係者以外……」

「んん？珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者と言うなら、一番はこの私をおいて他にはいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」

山田先生、撃沈。注意しようとした心掛けは良いけど、少し甘かった。そもそも『あの』織斑先生が最初にそう言う質問を束さんに投げかけていない時点で、束さんは織斑先生の許可があつてここに入つて来た、と言う事になるだろうから、注意は必要ない。

ポカンとしている生徒を見て織斑先生が束さんに自己紹介を催促すると、束さんは名前だけ言つてすぐに織斑先生に向き直る。自己紹介で名前だけ伝える、というのは果たして流行っているんだろうか。

織斑先生が、手が止まっている生徒達に次の行動を促す様に声を飛ばすと、篠ノ之さんが――あれ、苗字が同じ？――織斑先生の隣にいる束さんに歩み寄る。

「それで、頼んでおいたものは……？」

ためらいがちに篠ノ之さんがそう尋ねると、束さんの目があからさまにキラーンと光る。不思議な人だ。目が発光するなんて。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

びしっと自分の真上を指差す束さん。場の全員がその先を見あげ中、俺だけその先を見ず、ある一点を目を細めて見つめる。いやだって俺が悪い訳じゃないんだぜ束さんが思いつき腕を上げて青

春の果実がたわわに揺れるのがいけないんだきつとそうだ。

凄い大きさのそれを、瞬きせず見て目が乾き始めた時だった。

ズズーンッ！

「うおう！？」

「のわっ！」

背後から聞こえた凄い音の所為で、聞こえたのは自分の声と一夏の声だけだったが、他の女子もきつと悲鳴を上げているだろう。

だが、一体何事だと思って後ろを見て見ると、銀色のコンテナらしい物が鎮座しているのが目に入る。さっきまで無かったのに……と意味不明な落胆をすると、その謎の物体から放たれている雰囲気、に心当たりがある事に気付く。

大御所と初めて会った時にも、こんな雰囲気がある場所を支配していた。全員が見つめる中、コンテナの壁がバタンと倒れる。

その中であつたのは、

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『赤椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんのお手製ISだよ！」

赤だ。紅だ。朱だ。

それらが表すのは、血の色だ。

俺に不吉の念を押しつけてくるソレは、束さんの言葉に応えるように、動作アームによって外へ出てくる。周りの生徒達が言葉も出せずそれを見つめる中、逆にソレは俺を見つめている気がした。あざ笑うかのように、太陽の光を赤く反射して俺に浴びせてくる。

これは、敵だと思った。

頭を回して織斑先生を見ると、どうやら織斑先生も俺と同じ感想だったのか、苦い顔をしている。

そもそも『全スペックが現行ISを上回る』と言うのがおかしい。それではまるで、ISが『完成』してしまったかのようなではないか。束さんが篠ノ之さんを、フィッシングに誘導している。

「私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

「……それでは、頼みます」

……それにしても、専用ISをわざわざ造ったり、束さん自らフイッティングと言うこの優遇の在り方。なるほど、やっぱり……

「アイシー。親子だったか」

「姉妹だ」

「オウ、イチカ！いたのか」

「それはこっちの台詞だ！」

お互い、空気だった訳だ。

バカみたいなやり取りをしている間に束さんが、赤椿と篠ノ之さんのフイッティングを終了させる。流石、と言ってしまふほど速い。機体が機体でなければ、口に出して称賛していただろう。

だが、それを見ていた周りの女子がなんだか不服そうだ。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？身内ってだけで」

「だよねえ。なんかずるいよねえ」

群衆の中から聞こえたその声に、俺は女って怖いと思った。篠ノ之さん、イジメとか受けなければ良いのだが。しかし、それに最も早く反応したのは束さんだ。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

それを聞いた女子が、気まずそうに作業に戻る。

それにしても、今の台詞。

「……………」

俺は名台詞だと思った。真実を突きすぎていて、人類平等をかざす偽善者みたいな連中よりよっぽど良い人だと思う。大御所を思い出す物言いだった。

「あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよ」

自然に束さんが一夏にそう言うのと、一夏は軽く了承の返事をして左手を右手のガントレットに添える。やはり、というか丸分かりだったけれども、あれが一夏のISか。名前は白式とか言ったが、普通、アクセサリーの形態になるのに、何故防具なのだろうか。

一夏のISはすぐに展開し始める。ガントレットが強い光を放ち、

空気中に粒子を形成、最後にそれらが集まって一夏の体にその姿を現す。

白い機体だ。

ただの白では無い。虚の色の中に深さを感じる、力を持った機体だ。赤椿と対極にある様な機体だと思う。

「データ見せてね。うりゃ」

言うなり束さんは白式にコードをブスリと突き刺す。ISの装甲が一体どれほど強固なものなのか、ISの生みの親である束さんに今一度問いただきたい光景だ。

「んゝ……不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんだろう？見たこと無いパターン。いっくんが男の子だからかな？」

空中に表示された半透明のディスプレイを見ながら束さんがそこまで言うと、突然何かを思い出したかのようにキョロキョロと辺りを見回す。そしてその目は、俺を見る位置で止まる。

「……………」

「……………」

なんだろう。何て言えば良いんだろう。なんか適当な挨拶とかしておいた方が良さのだろうか。それならば、よし。

「アゝ……大御所がいつも世話に」「君のIS、彼が造ったんだよね？」

……そりゃ、知ってるわな。じゃあ隠す必要もないのか。

「イエス。そうだよ」

「君のISも見せて！」

白式に差していたコードを引き抜き、その先端を俺に向けてくる。目がなんだか光っていて、リアルに言い直すと、発光していて不気味だ。

それにしても、なぜ大御所の造ったISなんか見たがってるんだ？『渡りの悪魔』は世界のトップシークレットで、束さんがその存在を知っているとはとても思えない。それを抜いたら大御所の……言っちゃあなんだが、あまりにも平均過ぎる能力を持ったあの作品

を見せるのは、恥ずかしい。

ギンギラギンに輝く目をこっちに向けながら迫って来る束さんに、俺はどうやって拒否をすれば良いのだろうかと考えている。と、山田先生が織斑先生の元に走って行くのが見えた。

「ハワイ沖で試験稼働を……」

なんだろう。凄い慌てている。

普通ではないな。それには他の生徒達も気付いたらしく、織斑先生と山田先生は生徒に聞かれては不味い内容なのか、途中から手話を使い始める。

普通の手話ではないので、解読が出来ない。

すると話が終わったのか、山田先生は織斑先生から離れて行き、残った織斑先生は声を上げる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へ移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館へ戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

それを聞いた女子達がざわざわと騒がしくなる。

だがそれを織斑先生が一喝すると、女子群が慌てて撤退作業を始める。

俺も撤退を、と思った時だった。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰！——それと、白砂崎と篠ノ之も来い」

そう言われて集まった人員を見て、びっくりしたの必然か。

織斑一夏と篠ノ之さんは良いとして、セシリア嬢、シャルロット殿、ランジェリー・ラウラちゃんに、昨日のビーチで溺れたツインテールの東洋人もいる。まさか、この面子が全員専用機持ちだったとは。一夏ハーレムズ、戦争を起こせますが何か。って感じた。

だが、これだけで尋常ではない事が起こっているのが分かった。

一般生徒を返して、専用機持ちだけを残す様な異常事態。

この時、姿を現さない大御所の事を思い出した俺は、果たして恩知らずなのだろうか。

第六話「ナイト・トゥ・モーニング」(後書き)

白砂崎がハイテンションじゃ無くなってきたのは、筆者のテンションが下がってきているからです。

白砂崎と大御所以外のキャラのオリジナル台詞が下手くそなのは、川喜多がキャラの性格を把握しきっていないからです。特に束さん。『束さん』と打つ時に『たばさん』と打って変換している事は誰にも知られてはならない秘密です。

小説の事しか頭がない所為で、学校の成績が瞬時加速ばりの勢いで下がっている事は先生しか知りません。

今年の抱負は、『電撃大賞』で二次選考を通る事です。宿題でそれを書いたら、川喜多だけ先生からのリアクションがありませんでした。

「電撃だったらインデックスの二次書いてろよ！」なんて思わないで下さい。

以上です。(後書きじゃねえ！なんて叫ばないで下さい……)

第七話「イヴィル・イエロー」

ビーチで集められた専用機持ちは、後に旅館の最奥に設けられた大宴会場に移動し、そこで今回の件の概要を説明された。

簡単に言ってしまうと、数時間前にハワイ沖で試験稼働をしていたアメリカ・イスラエルが共同開発した第三世代型の軍用IS『銀の福音』が制御下を離れて暴走し、監視空域より離脱したというものだ。

俺達が呼び出された理由と言うのは、衛星によって福音を追跡した結果、ここから二キロ地点の海上を福音が通過すると言う事が分かり、それをこの場に居る専用機持ちが対処する、と言う事になったからだ。どうも、学園の上層部が決めたらしい。

その間、教師陣は付近の空域や海域を訓練機によって封鎖するそうだ。

そして敵のISのスペックを確認した今、誰が撃墜に当たるかを決めている所だ。

「この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速四五百キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

織斑先生の言葉に、山田先生が続く。

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

一撃必殺か……この中でそんな攻撃力を持つ機体がいるのか……

？ 何故みんな一夏を見ているんだ？ この流れで一夏に注目が集まると言うことは……つまり。

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね」

皆それぞれの意見を口にして言っただけ、その矛盾点や問題点を別の誰かに指摘されていく。作戦会議なんて初めてだから、こんな空

気も初めてになる。大御所と一緒に過ごした半年間は、自分が最善と思う行動を即席で組み上げて、それを実行しろ、って事を教え込まれたからな。

ナイフ片手に密林を走り回っていた男が、今じゃISを使える男の肩書き背負って世界のトップに位置する学校の実戦作戦会議に参加しているなんて、我ながら面白い経歴を持っているもんだ。

「おい、白砂崎」

と、誰かが俺を呼んでいるぜ！声からして織斑先生だと思うけど。
「ワット。なんでそうか？」

「わたくしのブルー・ティアーズのスペックを見てほしいんですけど」

「お前のISの方が速度を出せるようなら、オルコットでは無くお前を起用する」

なるほど。一夏は完全に攻撃に専念するから、少しでも無駄なエネルギー消費を避けるため、誰かが一夏を運んで行く、という事になったのか。

さてと、セシリア嬢のISを吟味しようではないか。

「……………」

「……どうですか？」

「……おいのISよりもずっと速いな。セシリア嬢でノープロブレムだ」

再び、俺のISのスペックが平均の物だと思い知らせてくれるデータだった。流石第三世代ISってところだ。俺のISは第……第何世代なんだ？ あれ？

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二〇時間です」

「ふむ……。それならば適任——」

「待った待った。その作戦はちよつと待ったなんだよ」

織斑先生の言葉を遮るように、やけに明るい声が上から聞こえてくる。

見ると、生首が天井にぶら下がっていた。しかもニコニコして「やっだ、気持ち悪い（棒読み）」って感じた。思わず声に出しちゃったけど、誰もツッコんでくれない所に皆の優しさを感じるネ。

天井から逆さに生えていたのは、束さんの頭だった。

それがクルン、とサーカスのピエロ顔負けの身のこなしで降りてくる。科学者って、運動神経悪いイメージがあるのに。大御所も昔は科学者やってた、って言ってたな。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ホラ！これでスピードはばっちり！」

展開装甲？ 聞いたこと無いな。他の連中の顔を見て見るが、俺と似たり寄ったりな表情をしている。束さん専門用語か何かだろうか。

「説明しましよーそうしましよー。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代ISの装備なんだよー」

……第四世代？ 今世界で開発してるのは確か第三世代……第四世代って言うことは、一つ飛ばしている事になるのか。凄いな篠ノ之束。

周りを見ると、みんな俺より啞然としていた。なんだ、やっぱり凄い事なんだ。

すると、束さんはそんな連中に第四世代、そして展開装甲のなんたるかを説明し始めた。

どうも、展開装甲というのは必要に応じて攻撃・防御・機動に切り替えが可能で、いわゆる即時万能対応機と呼ばれる類の事なのだからとか。

一夏のISの一部にも使われているから、白式も一応第四世代だということらしい。ただし、紅椿はそれを全身に使っている上に、白式のよりも発展したタイプだから、全展開時はスペックは今の倍になるとか。

なるほど、最強だ。

大御所も自分で作ったりしないで、最初から束さんに制作依頼を出していれば、俺も第四世代のISを使ったのかも知れないのに。

「――束、言っただろ。やりすぎるな、と」

「そうだったけ？ えへへ、つつい熱中しちゃったんだよ」

なんて陽気な方なんだ。熱中すると、たった一人で各国の最高技術とその頭脳を軽く上回る実力を発揮するんだから、やっぱりただ者じゃないのか。

「話を戻すぞ。……束、紅椿の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

「お、織斑先生！？」

なんと、セシリア嬢ピンチ。せっかくの手柄を、昨日今日現れたルーキーに横取りされるなんて、思ってもみなかったんだろう。……セシリア嬢もルーキーだけど。

「紅椿の調整時間は七分あれば余裕だね★」

「よし。本作戦では織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三〇分後。各員、ただちに準備にかかれ」
パン！ と織斑先生が手を叩くと、教師や一部の専用機持ちたちが作戦バックアップのための機材運搬を開始する。俺も近くの人を手伝い始める。

それに出遅れた一夏は、織斑先生に何をすればいいのかを聞いているのだが、そんなのISの調整に決まってるでしょうが。

黙々と作業を進める中、一夏にアドバイスをするために織斑ハーレムズが彼の元へ集結している。俺はそれを尻目で見ながら、機器の調整を手伝うのだった。

時刻は十一時半。

作戦の開始時刻だ。

サンサンと太陽の陽が降り注ぐ浜辺に、一夏と篠ノ之さんが立っている。互いに目を合わせて一度だけ頷くと、同時に自分のIS

を呼び出す。

光の粒子が二人の体を包み、弾けると、そこに白と赤が現れる。
一対、という言葉がしっくりくる。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

女の上に男が乗るのは許さない、と。

.....コ

ホン。え？なに？やましい事？やだなあ考えてないよあははまった
くうたぐりぶかいなあもう。

白式が紅椿の上に乗ると、二人がブツブツと喋りはじめる。

ISに通信が来ているのだと思う。

そしてそれが終わったのか。空気が変わる。作戦開始の緊迫した
空気が、素人の俺にも伝わって来る。刹那、紅椿は白式を背負った
まま、高々度まで飛翔する。凄まじいスピードで飛び上がった紅椿
は、脚部と背部の装甲からエネルギーを噴出させながら海の彼方へ
と消えて行く。

残った俺達は、帰りを待つだけか。

とか言っていたら、笑うしかない事態が起きた。実際に俺は嘔き出
しそうになったのだが、空気を読んで唇を噛みながら笑いをこらえ
た。

織斑一夏が、瀕死で帰って来たのだ。

ボロボロの紅椿が、ボロボロの一夏……白式で無く、一夏を背負
って俺達の所へ帰って来たのだ。

篠ノ之さんは最初一言も事態を報告できないような疑似放心状態
だったが、織斑先生と個室に二人っきりの間に色々と話したらしく、
その内容は知らずと俺の耳にも入って来た。

織斑一夏と篠ノ之箒は目標に接触後、戦闘を開始。敵機の予想以

上の性能に翻弄されながらも篠ノ之箒が敵機を押さえるが、織斑一夏はその機を棒に振り、進入禁止海域に行く密漁船を敵機の砲撃から救助。その後、エネルギー切れを起こした紅椿が敵機の広範囲攻撃を受けようとするも、織斑一夏がその盾となり、ISの絶対防衛が致命領域に突入。

その結果、織斑一夏は昏睡状態に陥った。

かくいう俺は今、一夏の寝かされている寝室にいる。ちなみに、篠ノ之箒も一緒だ。

体のいたるところに包帯を巻かれた一夏を目の前にすると、どうも笑いそうになってしまう。篠ノ之箒がいなければ、きっとこらえる努力もせずに大笑いをしていただろう。

「ヘイヘイ、イチカ。一撃で屠るんじゃないのかー？　こんなところで眠りこけちゃって、気持ち良さそうな顔しちゃってー」

ベッドに横たわっている一夏を見下ろす位置に立って、おどけた風にそう言う。笑うのは堪えてはいるが、顔の筋肉が言うことを聞かず、ニヤニヤしっぱなしだ。

篠ノ之箒が俯いていなければ、この顔を見られていただろう。

しゃがんで、一夏の頬をつつく。

「うりうり。って、うわ、ちべてーなおい。カロリー足りてんのー？　体温が右肩下がりなんだぜコノヤロー（笑）」

アウチ、やば。最後わらっちゃった。でも大丈夫か。どうせ篠ノ之箒は聞いちゃいな……。

「……おい」

「あん？」

低い声が後ろから聞こえて来た。面白そうなので振り向くと、篠ノ之箒が俺を睨みつけたいた。

なんでだろう？

「お前……」

「ハハッ、怖いなー」

眼光が攻撃力を持っていやがる。そんな目を女子がするんじゃないあ

りません。

「全くだ。『負け犬』はもっと『負け犬』らしく項垂れていれば良いのにな」

「……ッ!!」

「あれ、大御所？」

「よお」

音も無く部屋の入り口から現れたのは、大御所だ。しかも久々の登場にも関わらずサラッと酷いこと言ってるし。

「いやあ、なんだ。讓ちゃん、織斑一夏はアンタの所為で死にかけたんだろう？ 昂葉に眼飛ばしてないで、地べた這いつくばって泣きながら一生分の後悔をしていればいいのに。それが負け犬の義務だろう？」

酷ッ！あれ、大御所ってこんなキャラだったっけ？

……いや、なんでキレてんの？

「貴様ア！」

「おう。なんだ、敗者」

「っ!!」

ぐい、と篠ノ之箒が大御所の胸倉を掴み上げる。あーあー、大丈夫なのか？ 次の瞬間には肉塊になってたりしないよな？

「突然現れては敗者や負け犬と、一体何様のつもりだッ！」

「何様？ おかしなことを言う。おれは『様』を付けられる類の人間とは対極の位置に存在している。そんなヤツに何様とは、讓ちゃん冗句のセンスないんじゃないの？」

やっぱり大御所キレてる！ 何故に？ 何故に!？

そんなやり取りをしていると、篠ノ之箒が手を挙げて、大御所の顔に……。

バシヤンッ！

「!？」

「……え」

大御所の顔が、弾けた。まるで水に思い切り平手を叩きつけたかのように、澄んだ水が辺りに弾けた。

大御所の首から上には虚があり、頭が無い。しかし、床や壁に散らばった水が生物の様にモゾモゾ動き出すと、大御所の首にそれらが集まって行き、再度大御所の頭を形成する。

まるで、SF映画の一シーン。

半年の間、大御所とずっと寝食を共にしてきた俺も、初めて見た。「……ったく、なかなかの威力じゃねえか。負け犬のくせに、まだこんなに力が余ってたなんてな」

首をコキコキ鳴らしながらそう言う大御所に、俺と、恐らくは篠ノ之箒も『人類ではない可能性』を覚えるのだった。

その篠ノ之箒は相当に驚いたのか、大御所の襟首から手を離し、自分の手と大御所の頭を交互に見比べている。

「ふう……。元氣も出たようだし、人の気配もするし、俺はここらでおいとまする」

「……大御所」

「なんだ？」

「何のためにここまで……？」

俺がそう言うと、大御所は笑って篠ノ之箒を見やる。

「負け犬は、地べたを這いつくばってさんざん泣いて後悔した後、僅かな可能性を追って『さっきまでの自分にできなかった事』をしなくちゃいけないんだよ」

大御所が、なんか、遠くを見てる。

遙か昔を思い出してるみたいだな……。昔？ まさか、大御所がキレてたのって、篠ノ之箒の状態が昔の『失敗を犯した自分』に見えてしまつて……。それが許せなかったとか……。？

やっぱり、変わった人だと思う。

それを言葉にして伝えようとすると既に部屋には大御所の姿は無くて、代わりに床に黒い端末が落ちている。

それを拾うと、同じタイミングで部屋の扉が開き、ツインテールの……確か名前は、鈴さん？が入って来た。

「あら、意外に元気じゃない。てっきり項垂れてると思ってたけど、励ます手間が省けて良かったわ」

「励ます手間？」

篠ノ之箒の代わりに俺がそう言うのと、鈴が後ろを――彼女がたった今入って来た扉を振り返る。

そこには黒い軍服に身を包んだ、ランジェリー・ラウラちゃんが立っていた。

「福音の居場所を割り出した。ここから三〇キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

端末をもってランジェ（ry）ちゃんが部屋に入ってくると、鈴さんがニヤリと笑ってそれを迎える。

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

ドイツ軍？なんと、軍の人であったか。軍服をコスプレだと思っ

てしまった俺は、ひそかに萌えを感じていたのに。

そんな凜々しいラウラちゃんに続く様に、その後ろから続々と織斑ハーレムズが現れる。

皆、目に闘志が宿っている。まさか。

「敵機の座標を割り出して、攻撃態勢全開。アタックするんですかい？」

「当然よ。一夏をこんな目にしておいて、ただで済むと思ったら大間違いなんだから……！」

皆さん、神妙な顔つきだ。

篠ノ之さんもそれに参加する気になったのか、ハーレムズと同じ顔になっている。決意したのか。

「昂葉、アンタも行くでしょ？一夏がこんな目にあっただから……」

「いや？おいは行かない」

「え……」

全員、そんなに俺の返答がおかしかったのか、咄然としている。

「行かないって、アンタ……」

「おいはまだここに来てからそんなに経ってない。っていうか、一日経った程度だ。この男に心酔しているあんた等とはともかく、おいはまだそんなにこの男を知らない」

「そんなことを言っておいて、本当は怖いんじゃないのか？」

ランジェリーちゃんもといアーミーちゃんが冷たい視線で俺を見る。やめてくれ、変な性癖に目覚めそうだ……。

「そう思ってくれても構わない。とにかく、おいは今回の強襲には参加しない。それだけ」

「……そう、わかったわ。みんな、行きましょう」

鈴さんが部屋を出て行くと、他の皆さま方もそれに続いて出て行く。もちろん、篠ノ之さんも。

ボタン、と扉が閉められた部屋に残ったのは、俺と一夏だけ。

その横に俺は座り、窓から見える、遠い青い空に浮かぶ入道雲を見ながら呟く。

「俺が強襲作戦に参加しなかった本当の理由はさ、

俺が参加したら、簡単に福音を倒しちゃうからなんだよ。イチカ」

旅館の屋根に登って、遠くの海を見る。

ISで強化した視界に見えるのは、光と影だけ。

福音の翼から放たれる砲撃に、五人の専用機持ちが翻弄されている。かわして、防御をして、隙と余裕が出来たら攻撃する。

それぞれが機体の性能に沿った役割をしていて、ただでたらめに乱戦を仕掛けるよりも効率的に戦闘が進んでいるように見える。実際に乱戦なんか仕掛けていたら、ここまで戦闘は持たなかっただろう。

「俺も行けば良かったかな……」
いやいや。俺後悔してばっかじゃん。自分で選んだのに、後悔するなんて。

『耳』だけ遠くに飛ばして、戦闘の音をBGMにしながら、大御所が置いて行った鍵型の端末に付いているボタンを押す。

空中にディスプレイが広がって、幾つかのファイルを表示させる。
「……? 『織斑一夏』、『篠ノ之箒』、『セシリア・オルコット』、『凰鈴音』、『シャルロット・デュノア』、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』……」

……..
とりあえず、ラウラ・ボーデヴィツヒのファイルを開く。

「……………」
そこには名前と、国籍と、経歴と、専用ISの詳細と、スリーサイズが記載されていた。

スリーサイズが記載されていた。
スリーサイズ以下同文。

つまり、一夏とそのハーレムズの個人情報があるにあってたのだ。
大御所、一体何をしていたんだ……まさか、昨晚からさっきに掛けて姿を見せなかったのは、各国にこれらの情報を集めに行っていたから? だったら今頃、お偉方は核シェルターの向こう……?

「なるほど。俺がやっこさんの事なにも知らないからって……ったく、大御所の野郎……」

芝居掛けて空を見上げる。眩しい。まったく、良い師匠を持つ『キアアアアア……!』

「ギャア!」
うるさい!

ああしまった、耳を向こうに飛ばしてるんだっけ。

目も向こうに飛ばすと、福音が大きく変化していた。

エネルギーの翼が頭から生えているのだ。

そして、ボーデヴィツヒ少佐がそれに抱かれ、解放されたと思っ

たら海へと一直線に落ちていく。

瞬殺だ。

その次にシャルロット殿が飛ばされ、セシリア嬢も落とされる。残った箒頭首は、仲間の仇を討つべく猛攻撃をする。

「だけどもあ、あんな闘い方じゃ、すぐに落とされるのは目に見えてるけど……」

展開装甲を巧みに使って避けてはいるものの、それもすぐに終わってしまうんだろうな。

と、足元に何か気配を感じる。ガラガラという音も聞こえて、本格的に俺の下部屋に誰かがいると言うことを思い知らせてくれる。滑り落ちない様に注意しながら、屋根の縁に立って真下を見下ろすと、部屋の窓から空を見上げる一夏と目があった。

窓から白いカーテンが外に躍り出て、ついでに一夏の包帯も解けかかっているらしく、それもヒラヒラと風に乗って空を泳いでいる。俺にはなんで一夏が起きているのか分からない。一夏も、俺がなんで屋根にいるのか分からないだろう。

互いに無表情のまま見合っていると、俺の遠くに飛ばした耳が爆発音を拾う。それを聞いて、一夏がなんで起きて来たのか分かった気がした。

俺には白に包まれた一夏が。

一夏には黄金の陽光に包まれた俺が。

「……………」ニッ。

「……………」ニヤリ。

見つめ合って、互いに笑う。

——お前も行くだろ？

——面白いじゃないか。

男にはどうも、意気投合した時だけ出力する特殊なテレパシー器官があるらしい。

それに気付いた俺達は今一度、満面に闘志の笑みを浮かべて、同時に叫んだ。

「行くか!」

八話へコンティニュー

第八話「ホワイト&イエロー」

篠ノ之箒は、福音の翼に抱かれていた。

首は直接その手に絞められ、まさしく決着が付こうとしている。

その時彼女が考えるのは、一夏の事だ。

今もまだ寮の一室で寝ている思い人に、彼女はただただ一つの思いを胸に咲かす。

会いたい、と。

今すぐ会いたい、と。

しかしその願いは届かないだろう。

彼女を抱く福音の翼は光を増して行き、もうすぐ彼女は海へ落とされてしまうのだ。

それを知っていても、彼女は彼の名を小さく口にするのだ。

「いち、か……」

消えそうな声を、夢いその声を、福音が聞くことは無い。

ただ、目標を消すだけ。

翼の光が密度を増して行くと、箒も覚悟を決めて目を瞑る。
そして、

福音の手が箒から離れる。

突然の事に混乱した箒が目を開けて見た物は、荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった。

（な、何が起きて――）

そして、彼女の耳に響いたのは、陽気な声。

「Hey Hey Hey! イチカ、初っ端からデカイもん撃っち

やって、派手だなあ！」

「うるせえよ、昂葉。こうじゃなきゃ間に合わなかったかもしれないだろ」

彼女の視線の先には、陽光をその身に浴びて光り輝く白の機体と、見たことのない黄色の機体。

福音が体勢を立て直すと、その二機は紅椿の盾となるような位置に移動する。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

「ヒュー。Coolだぜ、イチカ」

二人は、二機は、輝いた。

格好つけたのは良いとして、まさか第二形態になってしまいうなんて。

まあ、この面子なら不可能じゃないけどな。

ついでに、一夏も第二形態へ移行した。今まで『雪片二型』と言う近接ブレード一筋だった白式には、状況に応じて砲を撃ち、シールドを張れる『雪羅』という武器が追加された。機体本体にも、ウイング・スラスターの大型化なんていう変形が見られた。

その一夏は、箒頭首に何やら泣かれていた。

「よかつ……よかつた……本当に」

そんな箒頭首を受け止める一夏は、懷から何かを取り出して、それを箒頭首に渡す。

リボンだ。

「り、リボン……？」

「誕生日、おめでとうな」

ハッ、粹なヤツ。これじゃ、織斑ハーレムズが出来上がる訳だ。

それを箒頭首に渡した一夏は、俺の元へと戻ってきた。

「すまないな」

「いや？ No problemだ、イチカ」

二人して並んで、銀を睨む。

そして、

「再戦と行くか！」

一夏のその声で、実戦が開始される。

高速で迫る福音に、俺と一夏は左右に分かれて挟撃の体勢を取る。俺は両手に一対のガトリング銃『クレイジー・ガトリングTwins』を発生させる。四つの銃口がそれぞれ気の狂った方向に向いているが、どれか一つから発砲することも可能だ。

俺と一夏は福音の周りをグルグルと、『円』ではなく『球』を描く様に複雑に飛行をしながら各々の武器で攻撃をするが、相手の頭から生えているのは一対のエネルギー翼。一人に一つ分の翼を当ててしまえば、たとえ二対一だろうと事足りてしまう。

現に、今は福音の攻撃を避ける事を第一優先にして、こちらに余裕が出来たら砲を撃つという流れになっている。

第一形態だったのなら一人でも倒す自信があったのだが、これは少しキツイ。

福音の機動力は、会議で見たスペックのそれよりも強化されている。その動きに翻弄されて、せっかく撃った一夏の荷電粒子砲や俺のガトリング弾がろくに当たらない。

この戦いは、不利だと思う。

特に、一夏の白式は大型化や新武器の追加などがあったため、従来よりもエネルギーの消費率が酷くなっている筈だ。大御所が持つて来た一夏のデータを見たが、元々がアレでは十分と持たない。

狙うは、短期決戦……！？

「アウチ！」

目の前ストレスをビーム砲の様な物が通過して行った。寸で止まらなかったら、直撃していただろう。

見ると、一夏の撃った荷電粒子砲を福音が上昇して避けたらしい。対極にいた俺に、その流れ弾が飛んで来たということか。

「Hey Hey Hey, イチカ！ 精力盛んなのは良いが、そん

なにズガズガ撃ち込んでつと、すぐにダウンするぞ」

「まだ扱い慣れてないんだよ。エネルギー配分が難しいし……！ 昂葉ッ！」

一夏の声を聞いて福音の方を見やると、その頭に生えている二つのエネルギー翼が尋常ではないほどに膨らんでいる。嫌な予感しかない。

「三六〇度全方位砲撃……！」

上に行こうが右に行こうが左に行こうが下に行こうが、結果は同じだ。

あの攻撃をされた時の選択肢は、二つ。

前進して捨て身の攻撃を行う。

そして、後退して防御をする。

……いや、三つだ。

「昂葉、俺の後ろに……！？」

一夏の声が聞こえた気がしたが、悪いがここは気の所為と言うことにさせて貰う。

(ピラビット、シールド)

ガトリングガンを収納しながら念じると、パシッという空気の抜けたような音が五回、俺の腕から聞こえる。左右の上腕にそれぞれ三個ずつ備えられている計六つの四角推から、五つの物が飛び上がる。

小型ビットの『ピラミッド・ビット』。

宙を踊る五つのビットは割れるように展開し、俺の周りで止まる。四角推の頂点五か所にビットを設置させ、その中に俺自身を閉じ込めた、四角推の全方位防御シールド。

すると、展開完了と同時にドオン！と福音の方が全方位に撒き散らされる。

今ならば、無防備！

背部に浮いている、二つの拡音気のようなアンプと機関銃の冷却部の様な穴が開いた三つの細長いスラスターをフルに稼働させて、目

前まで迫ったいた光の壁へ突っ込む。

エネルギー弾幕の中は、シールドを張っているにもかかわらず、低温火傷の前触れのようなあの耐えがたいヒリヒリとした感覚を全身に起こさせる。

だが、永遠では無い。

二秒もかからない内に抜けると、俺の目の前に再びあの銀を踊りださせる。

ビットのシールドを解き、新たな武器をコールする。

銘は、『スイヒョウガ・アレンジ』。銀の刀身が淡く青に発光している、神秘的な刀だ。

それを両手で持ち、直上の上段に構える。福音は何か危険を感じたのか、後退するが、この刀の前では意味が無い。

何故なら、スイヒョウガ・アレンジは伸びるからだ。物理武器の筈のアレンジは、現に既に数キロ単位の長さに伸びている。

俺はそれを、容赦無く福音に振り下ろす。まるで物理法則に喧嘩を売っているとしか思えない速度で刃が落ちて行き、福音を、両断……出来ていない。

僅かにかわされ、頭に生えている一对の翼の内片方を切り取っただけだった。

「チッ！」

アレンジはそのまま切り抜けられて行って、海を割る。

福音は、そんな身動きの取りにくい俺の状態を見て倒す好機だと思っただのか、翼にエネルギーを蓄え始める。密度が増えて行くその翼に、しかし俺はアレンジを手放そうとはせず、避けようとも思わない。

そして、光が爆ぜる。

全方位に放たれた無数の砲の一片が、俺に向かって飛んでくる。当たるか当たらないかの極限の一瞬に、俺と福音の間に白い影が割って入り砲を全て無効にする。

「おい昂葉！一人で突っ込みすぎだ！」

「Ah Han? イチカだって、一人だったら特攻するでしょ？」
苦い顔をする一夏を見ながら、アレンジを元の長さに戻す。小型ビットのピラビットも呼び戻し、辺りに浮遊させる。

「んで、どうするよイチカ。おい達思ってたより相性が良くない」
「勢いで出てきて、作戦なんて何もなかったからな……」

「……OK, 分かった。おいがピラビットでイチカを援護する。お前は攻撃に専念しろ」

「……分かった。その言葉に甘えさせて貰うぜ」

言うや否や、一夏は雪羅をシールドモードから荷電粒子砲に切り替えてまっすぐ福音へ飛んで行く。福音の頭の翼は、俺がさっき切り落とした筈なのに元に戻っていた。

一夏は例によって荷電粒子砲をバカみたいに撃ちまくりながら、右手の雪片を構えて突撃している。小刻みに動いてそれをかわす福音の翼が、また大きくなり始めている。

——三六〇度全方位砲撃。

一夏には、防御に出る気配が全くない。

信用されているんだか、ただのバカなのか。

とにかく守らなければならない。

「Guitar Beat!」

手の中に黄色の、わりかし地味なギターを呼び出す。外見的特徴と言えば、機関銃の冷却機関の様な穴が開いた、鈍い鋼色の円筒が付いているくらいだ。

それを、弾く。

一音だけ、撫出るように鳴らすと、ピラビットが全機一夏へと飛んで行く。続いて二音目、三音目、やがて一小節になり本格的な演奏を空の戦場に響かせる。

一夏の周りを踊る様に飛ぶピラビットが、福音と一夏の間に盾を作る。四角推の展開図の様な形をしたそれが福音の砲撃から一夏を守ると、今度は元のピラミッド型に戻って、レーザーによる援護射撃を開始する。

ギター・ビートの演奏中は、ピラビットの性能が強化される。援護向けの武装だ。

六機の小型ビットが福音の足を止め、一夏がそれを狙う。

福音はビットを落とそうとするが、その小ささに中々破壊が出来ない。

この調子でいけば、勝てる。

そう思ったのは必然だろう。だが、どうも俺は懸念すべきことを一つ忘れていた。それは俺に背を向けて闘う一夏を見て、どう見ても明らかな物だ。

動きが鈍くなっている。

エネルギー切れが近い。

(……マズイ。このままだと一夏が落とされる)

行動の選択肢が頭の中に浮かぶ。

俺も前線に出る。これは妥当だ。普通ならそうするだろうが、そうなると全方位射撃を二人分担当しなくてはいけなくなる。今の一夏にシールドを張れるだけのエネルギーは残っていないだろうから。

もう一つは、俺の、ギター・ビートの単一仕様能力を発動する。

これは荒業だ。一夏の機体に負荷を与える可能性が大きい。使えばどんな逆境からでも敵を打ち倒せるだろうが、それを一部しか使いこなせていない俺には、支援ISに何の影響も与えない、というのはハードルが高すぎる。

やはり前線に出て共に……？ 何かがこちらに目掛けて飛んで来る。俺の後ろからだが、砲といった類の物では無い。もっと大きい。後ろを振り返ると、ちょうどその『何か』が俺の視界を通過して行った。

金色の粒子を残して。

「箒頭首……？」

突如現れた紅い機体が、福音を大きく弾き飛ばす。

普通の様子では無い。闘志に溢れている。その機体の手が白式の装甲に触れると、目視で理解が出来るあり得ない現象が起こった。

（一夏のエネルギーが、回復した……）

これは、単一仕様能力だ。そうとしか考えられない。

そんな俺の疑問には一切気付かず、動きにキレが戻った一夏と、
箒頭首が共闘して福音を追い込み始める。俺も慌ててギターの演奏
を再開し、ピラビットの援護を強化する。

防ぎ、撃ち、斬る。

あの二人は相性が良い。

俺と一夏の時よりも、ずっと福音を追い込んでいる。

そして、ついに。

「おおおおっ！！」

雪片が福音を屠った。

『最後はあっさりで行ったんだぜ』

『そんなもんだろ』

『もちよっと、格好良く決めてくれても良かったんでねえの？あれ
はラスボスを通常攻撃で倒した感じに近かった』

『……そんなに地味だったか？』

帰還日。

俺と一夏はバスの中で仲良く隣同士に座って昨日の事を話す。と
いっても、あの一件は重要機密なので、ISのプライベートチャネ
ルで会話をしている訳だが。

昨日の戦闘の後、一夏は夜になるとどこかへ行ってしまった。月
へ帰ったのだろうか、と、弧室の窓からぼんやりと夜の海を見つめて
いると、なんだか銃声が聞こえてきて。一夏が部屋に戻ったと思っ
たら、もの凄く疲れた顔で部屋に入ってきて驚いたものだ。

その時、何故か男として負けた気がしたのは、言うまでも無く。
バスの中では、昨日の件を知りたがっている女子に、シャルル君
（シャルロット殿）が質問攻めにされていた。あの面子の中では、
一番聞き出しやすそうだと思ったのだろうか。

しかし頑なに断り続ける彼女に、女子はついに諦め、自分の席へと戻って行く。

と、そこでバスに金髪のパツキンのナイスバデーな女性が入りこんできた。学校の職員と言う訳では無いらしく、その人は注目を集めながらもまっすぐ進み、一夏の前で止まった。

「君がそうなんだ。へえ」

一夏を興味深そうに見つめるその女性は、きつと、

『ハイジャック犯だ』

『なんでだよ』

『お前の心をジャックしに来たのサ、イチカ!』

『……………』

無視かよ。渾身のギャグが破られるとは。

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え……」

驚く一夏と俺。特に俺。だっていきなり金髪の美人さんが一夏のほっぺに

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う……?」

ヒューヒューと俺は知らず知らずの内に指を口に突っ込んで笛を吹いていた。高校男子の特殊アビリティ、『冷やかし』が自然に発動したのだ。

「ちょ、おま、止めろっ……!」

狼狽する一夏を見て、女性はほほ笑みながらバスから降りて行った。

「やーん、イチカ顔あっかしい」

うひひひ、と口元に手を当てて俺が笑うと、もの凄い殺気を感じた。

（殺気? くそ、どこから……!）

「イチカァァァ!」

「ぐあ、なんだよ、うるさい……」

カツ、と言う足音で一夏の表情が固まる。

「浮気者め」

「一夏ってモテるねえ」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいなのでしょうわね」

「はっはっはっ」

眼光が線を引いています、ハーレムズ。

そして一夏は、IS学園に着くまでの間、拷問の様な目に合った。
因みに俺は一夏の隣の席だったら、何回も余波が届いてきました
……。

第八話「ホワイト&イエロー」（後書き）

そしてやってしまった今日この頃。

「やったー波が来てるんだぜー！このまま最後まで書くんだぜー！」

→川喜多。←川喜多の親。

「就寝時間だ。寝ろ」

「イエス・サー」

そして『波』が来た日の翌日である月曜日。波なんてすっかり消え失せて、創作ゲージがゼロになり、読んでいて分かると思いますが、途中から文章力がぐっと落ちていきます。

この後書きも、「やめて！川喜多の創作ゲージはもうゼロよ！」状態で書いたので、死にそうです。しかも明日早い。

戦闘があっさり終わってしまった上に、ある作品の影響で戦闘描写はほとんど説明文と、迫力に欠けてしまいました。ごめんなさい……と言葉だけ贈ります。

次回も……遅くなるかな……。

第九話「サマー・バケーション」(前書き)

ちよつと過激な描写があるかもしれませんが。

可能な限り抑えたつもりですが、少しでもえちいの苦手な人は気を付けて下さい。

第九話「サマー・バケーション」

福音の件から、早くも一ヶ月近く経つ。

八月の今日、IS学園も特別な教育をしているとはいえやはり学校なので、夏休みに突入している。

生徒はそれぞれ自分の故郷に帰ったり、学園の寮に留まったままだったり、まさしく自分の思うように生活をしている。

俺は表向き行方不明の身なので、実家に帰ることも出来ず、学園に留まるばかりだ。因みに、俺は一人だった一夏の部屋に同居することになった。

IS学園の寮の個室って、なんかどっかのホテルみたいで、凄かった……。

そして現在。

俺がどこにいるかと言うと、寮の部屋の一角では無く、今月出来たばかりのウォーターワールドだ。行方不明者の顔を一々覚えていく様な警察や、親族や知り合いに合わなければ基本的に外出は自由なのだ。無論、男一人で来る場所では無いから、連れがいる。……俺が連れですいません。

大御所といっしょ！なのだ。

教育テレビでは絶対に放送できないような人非人である大御所は、風呂につかる様に両腕をプールサイドに広げて体を水に任す俺とは対極に、プールの水が波となって打ち上げるサイドの縁にあぐらを掻いている。

「……すまない、昂葉。もう一度言ってくれないか」

ついでに今は、福音の件を……正確には、第二形態へ移行した一夏と白式の事を大御所に話している所だ。

「だから、精力尽きかけたイチカのアレに箒頭首が触ったら絶倫状態になったんだよ」

「……………」

見上げた大御所の顔は、どこか遠くを見ていた。なんだか絵になる。やっぱり大御所は二枚目だからな。今も、通り過ぎる女子の三人に一人は大御所に振り向いては二度見している。見た目中年なのに、いいなーうらやましーなー。モテる秘訣ってなんだろう。今度一夏に聞いてみようかしら。

「昂葉」

「アイアイ」

「しばらく見ない内に、口が汚くなったな……」

「えー？　そうか大御しょボバボツ、カハッ！？　ああ、ああ、ごめんなさいちゃんと説明しますからさり気なく上から頭を押さえつけて溺死させようなんて真似やめてやめてお願い止めて下さボボツ！」
浮かんだり沈められたりしながらぎゃあぎゃあバカみたいに騒いでると、視線が増えたような気がする。

笑いながら俺を鎮めようとしている大御所の手をなんとかして退けると、水上に顔を出して濡れた目の辺りを手で拭く。

「俺が言いたかったのは、エネルギー尽きかけたイチカの白式に、箒頭首がちよつと触っただけでエネルギーが再チャージされたって事だよ」

「再チャージ……？　戦闘中のISがか？」

怪訝そうに言う大御所の言葉に頷いてから、あの後箒頭首が報告していたことを大御所にも言う。

「単一仕様能力らしいよ」

「ISのか？　エネルギー増幅のアビリティーなんて、凄い物もあったもんだな。……そう言えば、お前は使わなかったらしいな。単一仕様」

「アレは一对多に特化されてるから、あの局面で使うのには向いてなかった気がする」

そうだったかな、と言う大御所の呟くような声が聞こえる。

そうだったよ、と心の中でツツコミながら頭の黄色いバンダナを触る。プールの中でバンダナをしている、と言うのも変な話だが、

これは濡れても大丈夫なので着けたままにしている。そっちの方が
なんだか落ち着くのだ。

「それにしても、スゴイ人だな。これじゃ泳げない」

「それでも、水に浸かっている方が気持ちいいんだよ、大御……」
あ、そうだった。水と言う単語を口にして思いだした。今日俺は、
例の合宿での一件について聞くつもりで大御所の後を付いて来たの
だ。

あの、大御所の顔が弾けた件について。

「大御所」

「なんだ？」

「……………」

素直に聞いてみようか。それとも少し湾曲した言い方をした方が
良いのだろうか。

……いや、直球を投げよう。下手に遠回しな言い方をしたら、大
御所は絶対に気付かないフリをして違う話題へ持って行くだろう。

だから、小細工なしで。

右上に振り返って、大御所の目を見る。

「大御所は、人間じゃないのか？」

言われた大御所は、表情を崩さず、無表情のまま俺を見返してく
る。何を考えているのか全く分からない、ポーカーフェイスと呼ば
れるその表情に、俺の思考は無駄だと知っていながらも問いの答え
を捜し出そうとする。

俺が聞いてから五秒が経った、その時。

「俺は、」

大御所が口を開いた。

俺はつばを飲む。

嘘を言われるかもしれない。それをどういう風に、どこを基準に
して判断するかが、俺には分からない。しかし、大御所は容赦なく
その続きを口にする。

それは嘘か、本当か……！

「人間だ」

「嘘だ！」

「間髪いれずに否定するなんて、何年ブリだろうか
いや、だって、

「人間は平手打ちされた程度で、顔が水になって弾けたりしないんだよ大御所！」

どうだ、言っちゃった。

すごい常識を語った筈なのになぜだろう、大御所の俺を見る目が、とても可哀そうな物を見る目と同じ表情を語っているのは、なぜだろう。

「おいおい、昂葉、嘘だろ？」

「え、ええ……？」

アメリカの通販番組よろしく大げさな演出を付けた大御所が、両手を上げて首を横に振っている。なんだろう、すごい腹が立つ。そこまでするからには、納得の行く説明が用意されているんだろうな？

「いいか、昂葉」

「なに？」

「人間の体は、七〇%が水で出来ているんだぞ？」

……………ええと、はい？

「だから？」

「顔を殴られたら弾けるのは必然だろう」
思わず頭を抱える俺がいた。

この人は食えない人だとは思っていたし、飄々としていると言うのも理解していたつもりだったが、ここまで『俺、常識を語っていますが何か？』みたいな言い方をされたのは、今回が初めてだ。一発殴りたい。

「……大御所、本当の事を離してくれないか？」

なんとか衝動を抑えて、震える声で俺は言う。多分次が来たら我慢できないだろう。

「本当の事？」

「そう」

「あー……」

左上を見ながら、大御所は声に出して考える。

すると早くも整え終わったのか、大御所は「うん」と言うと、明日の方を見る。この人は明日がどっちにあるかを知っているのだから凄い。一体、何回日を越したのだろうか。

「俺の正体、と言うからには、『俺とお前の関係』の事を聞いている訳じゃないんだな？」

「それはもう聞いたから」

「だったら良い。………なあ昂葉」

延ばすな……それほど言いたくないのか？それともなにか他の理由が、

「異世界人って、信じるか？」

………そんなの、

いや、ダメだ、信じるしかない。

それを認めるだけで、様々なことの辻褄が合ってしまう。この人が、大御所が起こして来た全ての事象が、『異世界人だから』という理由だけで全て説明できてしまう。

たとえば、『渡りの悪魔』。この名前は、瞬時的に各国を移動できること指しているのではなく、もっと大きな。そう、例えば、世界と世界の間を……。

『では！本日のメインイベント！水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！参加希望の方は十二時までにフロントへとお届け下さい！優勝商品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアで招待！』

突然スピーカーから聞こえて来た声に、俺の思考が途切れる。

頭が熱くなっているのに気付いて、一回水に潜って冷やす。ゴポ

ゴボと水の音がする冷たい青の世界の彼方には、無数の足が見える。頭上からなのか、水面に歪んだ人の声も聞こえて来て。

五秒は沈んでいたか、やっと浮上して大御所の顔を見る。と、何故だろうか。その横顔は活き活きとした表情になっている。目線はスピーカーを向いていて……まさか。

「おい、昂葉。今の大会に出るぞ」

「……なんで？」

「俺は面白いことが好きだからだ！」

本当に楽しそうな顔だ。歳がいもねえぜ大御所。

「ほら、さっさと上がれ。早くしないと十二時になっちまう」

「まだ時間はあるよ」

一時間くらいある。そう急がなくても、参加はできるってーの。

とか言っていた自分が懐かしい。

俺と大御所は受付をやっているフロントへと辿り着いた。そして今は受付用紙を持った水着の女性を前にしている。

後ろは、振り返るまでも無く女性しかない。

俺ももう少し早く気付いていれば良かった。要は、今の時代は『女尊男卑』だ。この手のイベントに、男性が参加できる筈がない。そのことに多分大御所は最初から気付いていたのだろう。

だから受付のお姉さんに『空気読め』という視線で睨みつけられた時も、計算通りと言わんばかりに堂々としていた。

そうして今に至る。

「いいだろう？別に。募集の放送には『女性のみ』なんて言っただけだっただろうに」

「そ、それでも、ダメなものはダメ、なんです……」

言い合いをしているのだ。

お姉さんが舌足らずになっているのは、大御所が『落としながら交渉』しているからだ。そんな本気出してまで参加したいんですか

あんたは。

だがお姉さんも凄い精神力の持ち主だ。大御所にズズイと顔を寄せられた今も、赤面し目を回しながら断り続けている。

「なんでだよ？ いいだろ、少しくらい……」

「い、いひゃあ……だ、だめなものは、だめなんですう……」

おい。

大御所が完全に落としにかかった。言っていることが別の意味に聞こえてしょうがない俺がいるのだが、お姉さんもうギブ寸前だし、声が甘くなってる。これは、確実に参加決定だな。何故かムラムラするこの光景ももうすぐ終わり、っと？

「失礼」

「うん？」

水着では無く、普通に服を着ている男が大御所とお姉さんの間に割って入っている。

「誰だ、お前」

「当園のオーナー、向島光一郎と言う者です」

オーナー。

ヤバイ、追い出されるんじゃないか……それは無いか。今月開いたばかりのこのウォーターワールドで、早速客が追い出されたとか言われたら、経営に難が生じる。

「お客様、先程の放送は確かに説明不足でしたが、本来当イベントは……」

「いいよ、分かった」

諦めるの速ッ！男が出て来た瞬間かよ！

「はあ、すみません」

「良いって」

ほら行くぞ、と俺を呼んだ大御所の後を追いかける。心なしか、その顔に陰謀を感じる。

早足で歩く大御所の後を付いて行くと突然、壁に掛けてあるプレート状の園内の地図の前で立ち止まる。それとにらめっこした大御

所は俺に振り返り、

「昂葉、ここに行つてろ」

と地図の一角を指す。小さな通路の様だ。

「なんで？」

「行けば分かる」

じゃあな、と言って大御所は俺に説明すること無くどこかへ行つてしまった。

俺も疑問を覚えながらも地図を見て、通路への道順を覚える。

ここから左に行つて、右へ曲がつて……存外簡単に辿り着く。

薄暗いそこは、壁で行き止まりになってい上に急な曲がり角の所為で元来た方も壁に隠れてしまったいる。これでは外からここは見えない。人の気配はなく、それらしいものは遠くから聞こえる人の声だけだ。

果たしてここでどれくらい待っていればいいのだろうか。あの口ぶりだと、大御所もここに来るようだったから、やっぱり大御所が来るまでなんだろうな。暇潰しに、ISの調整でも

ペタッ。

「……………」

誰か来た。大御所か？振り返ってみると、あの急な角の所為で誰がいるのか分からない。もしかしたら興味本位の子供の可能性もある。

それを確かめるため、適当な名前——大御所、と呼ぼうとした時だった。

ペタッ。

「……っ！」

「……………」

なんと、これは……。

角から現れたのは、見たことも無い女性。腰まである長い、紫がかった黒髪。長い足に、ハッキリとくびれている腰。体系維持のトレーニングをしているのだろうか、たるみの無い女性らしい腹筋の

付いたお腹に魅力を感じる。ビキニに包まれたバストも申し分ない。でーカップと見た。

歳はそれこそ一部では『熟女』と呼ばれてしまいそうな、三十路くらいの中年。経験も豊富そうだが、その絶世の美貌の所為で、そんなことは関係なくなってしまう。艶めかしくも妖しくもあり、正に妖艶と呼ぶに相応しい。

俺を見つめる深い紫の瞳に、魂まで吸い取られる様な……。

「昂葉」

……俺の名前を、知っている？

まさかこの人、

「俺に会いに……？」

「当たり前だろう」

呆れるように言うその女性に、俺は確信したのです。

人生に、春が来たと。

「なんという、なんという……！！」アーメン！

「おい」

「はいなんでしょう！」

「これ」

ぱさっと女性の手から何かが投げられる。何かの布の様だ。

俺に届かず床に落ちたそれを拾うと、元々二枚あったのか、一枚落ちる。そして床に落ちたその形を見て、固まる。

ビキニだ。

しかも、下の方。

「あ、あの、これ……」

「なんだ」

「貴女の使い終わったヤツですkぶぎゃッ！！？」

蹴られた。顔を。

美女の足、美女の足！すべすべしてて、気持ちの良い……。

「昂葉、お前は……」

「は、はいいい！」

「この数分の間に男の物に欲情するようになったのか」

「……………はい？」

俺の筋肉が固まる。笑顔で固定されたまま、動かない。

美人さんの顔を見ると、冷たく見下ろしていた。その目は深い紫色で、髪も黒にほとんど近いほど濃い紫で……………その両方と、今までの言葉遣い。

全て、大御所と、同じ。

一気に萎えた。

「な、なんで…………」

今気付いたのか、と言うような顔で、大御所美女verが応える。

「大会に出たいからだよ」

「なんで…………」

「性転換なんて、簡単だろうが」

なんで、しか聞いていない上にさも常識を語るように言われてしまう俺の例。

そうか。あのイケメンが転換したからこんな美女になるのか。いつも大御所にちょっと声掛けられて目をハートにする女性を見て『そんな事あるわけないだろう』とか思っていたが、逆になって初めて大御所の眼力が如何なるものかを思い知らされた。

「ほれ、お前も早くしろ」

「俺は人間です貴女みたいに性別をコロコロ変えることはできません」

「だったら、ほれ」

常識を語った俺に、大御所は胸元に手を突っ込んで、それを弾ませながら何かを取りだす。女スパイか何かですか貴女は。それと目に悪いです。

「ほら」と投げ渡されたのは、小さな瓶だ。側面に文字の書かれたラベルが貼ってある。

「『Y f o r X』……YにXを……？これって」

「察しが早いな。性転換薬だ」

この人を本当にバカだと思った瞬間だった。こんな薬聞いたこと無いから、どうせ自分が作ったものなのだろう。大御所の体を見る限り、どうも効果は本物の様だが。

「俺は女になりたくない」

「男に戻るための物もあるから大丈夫だ」

バカだと、再度思った。

「そう言う問題じゃないでしょうが！」

「そう言うな。もう大会まで時間が無い。それを飲んでビキニに着替えろ。ビキニ好きなんだろう？」

「嫌だ！俺にはプライドがあるんだッ！」

ビキニとか、あり得ない。好きって言うのも、見るのオンリーで着るのは論外だ。

だから俺は、絶対に、着ない！

「……そうか」

「そうだ！」

「ならば、仕方がないな」

……へ？

「え、なになに、なんで大御所黒いオーラまといながら俺に近づいてくるの？ねえなんとか言ってくれよ大御所。お、大御所？なあ、おい。へ、返事してくれよ。おい、おいおいおい、おーーーーー！
ーい！ー！」

俺の思いは、届かなかった。

「さあ！第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

司会のお姉さんが、叫ぶと同時に大きくジャンプする。青春の果実がぶるんと揺れるのが眩しい。観戦席からはそれを見てか、男達

の雄叫びが聞こえる。

そんな風に傍観している俺は、精神的に死にかけていた。

その理由は……。

「昂子ちゃん、ほら手振って」

「……………いつか貴女を殺す」

「嫌だわぁ、昂子ちゃんこわい」

わたくし、白砂崎昂葉改め白砂崎昂子は、大御所に渡された薬を飲まされ、女になってしまった挙句ビキニを着せられ大会に出場する羽目になり、現在男の視線を全身に感じる所存でございます。

その恥ずかしさから自然に内またが擦れ合い、両腕を胸元を隠す様な位置に持って行ってしまう。ジョニい、どこだぁ……。しかしそれが良いのか、歓声が……。因みにBカップ。バンドナとして使っていた俺のIS『ギター・ビート』は、今はポニーテールにするために大きめのリボンと化していた。白髪に黄色のリボンとか、ミスマッチな筈なのに、すまないギター・ビート。

それよりも、大御所が女に成り切っているのが怖い。見た目の艶めかしさに反し、性格が若干幼いと言う所にギャップ萌えを覚えるのか、現に周りの男たちの視線の大半は大御所に集まり歓声を浴びせている。

「うふっ」

これ、やめなさい、ウインクなんかするな。ペアの俺が恥ずかしい。因みに、この格好のまま一人称『俺』を使ったあかつきには、大御所から鉄槌が下されるらしい。気をつけねば。

だがこの慣れ具合と女用の人格を用意していることから、大御所はしょっちゅうあの薬を使っていることが伺える。

「ん？ 昂子、あれ」

「……なに」

大御所子って呼びますよ、と言うのを堪えて指さされた方向を見る。変な二人がいた。

「な、んで……」

「良かったじゃない、昂子。友達もいて」

保護者みたいな笑みを俺に向ける大御所。俺と大御所は姉妹に見えているのだろうか。似ていないけど。

いやいや、それどころではないだろう。

「セシリア嬢に、鈴テール……！何故ここに！」

「呼んでみましょうか」

「貴女には一度死ぬことをお勧めします」

バレたらどうする気だ！

向こうは本気で勝つ気なのか、準備運動に専念している。

「なんか、一月前よりパワーアップしてるわね。身体とか、水着とか」

口元に指を添えた魅力的なポーズでそう言う大御所。この人があんな悪辣非道な世紀を揺るがすスーパーなトリックスターじゃなかったんなら、きっと俺も落ちていただろう。今もドキドキするし。

「優勝賞品は南国の楽園・沖縄五泊六日の旅！みなさん、がんばってください！」

お姉さんの声が聞こえる。

みんなこれが目当てなんだろうな。じゃなきゃ、自分の身体を人に見せびらかすようなこんな大会には出ないだろう。多分。

「貴女は別だけど」

「んー？なあに？」

柔らかい笑みを湛え、我が子を見つめる様な母性に溢れた目で見返される。

来た、悩殺。

この人があんな悪辣非道な以下同文。

「さあ！いよいよレース開始です！位置について、よいい……」
「パアンツ！というピストルの乾いた音と同時にレースが始まりました。」

俺は半瞬意識が遅れて、大御所を見やる。

大御所は、不敵な笑みを浮かべて俺を見ていた。

「ほら、行くわよ！」

「え、あ、うん」

手を引かれて走りだす。

この大会のルールは、中央の島に設置されているフラッグを取ったチームが優勝すると言うもの。中央の島はワイヤーによって浮いているので、泳ぐ事が不可能な以上、円を描くようにしてゴールへ続くコースを行かなくてはならないらしい。

「ショートカットは出来ない様に設計されているわっ。だから、ふっ！正規のコースを行かなくちゃならない、の！」

妨害にかかって来る水着の女性達を片っ端から水に叩き落とし、それでなおかつ俺の手を引いて先に行く大御所が説明する。ちなみに妨害はOKなのだそう。

レースに参加しているのは十三組二十六名。

見る限りでは、妨害組と逃げ切り組の二つに分かれているらしく、大御所は妨害しつつ逃げると言う器用なことをやって見せていた。

と、道が開ける。遅れを取り戻したことに安堵した俺がそこで見たのは、プールにぷかぷか浮かぶ複数の女性と、中国・イギリスの代表候補生だ。特に最後の二人は、コースを遮る様に立っている。

「あーもう、また！」

「キリがないですわね」

言いながらセシリア嬢が何かを丸めて客席へと投げる。途中で開けたそれは、ビキニ。プールに浮いているこの人たちは、アレを取られたから復活しないのか。

「あら。強敵登場ってやつね。でも私たち優勝したいから」

そう言っ大御所は俺を自分の横に立たせる。

………ばれないよな？髪白いだけだし、女だからばれないよな？

「あれ、あんたどこかで見たような……」

「確かに……」

ぎゃあ！思い出すな！

と、身体が慣性に引っ張られる。先行した大御所が俺の手を引い

て、二人を抜こうとしているのだ。

……いや、だめだ。これでは抜けられない！

そして、抜こうとした直後。案の定俺と大御所の体は宙に浮いていて、そして水に身体を叩きつける結果となった。相手の動きは見たものの、大御所の引っ張る力が強すぎて対処が出来なかった。

ザバーン、と男の時よりも控え目な量の水しぶきが立ち、青い世界に召喚される。でもそれは一瞬。

「ぷはっ！」

「はぁ！」

大御所の方が若干遅れて水面に出てくる。

コース上の二人を見ると、やはりというか、水着を取られていた。ここまでか。水着がないのでは、復活は出来ない。だってなんか恥ずかしいから。

「残念だったね、おおご……は？」

「え？」

「な」

「なんで……？」

俺はもちろん、鈴テールにセシリア嬢、司会までもが驚いていた。それはだってそうだろう。

大御所が……絶世の美女が、水着を取られたのにもかかわらず復活をしているのだから。本来は最初まで戻らないと上がる事は出来ないのに、大御所はここでその異常な身体能力を発揮する。

そして、コースに復活した。

双丘を晒しながらも。

「どうしたの？ せっかくのサービスなんだから、少しは沸いてくれない？ じゃない？ それとも私じゃ不満かしら」

絶句していた。会場内は異常な事態に反応が追い付かず、ただただ静かだ。

だが、大御所がそう言ったのに対してか、ついに。

「お……………」

「『才才才才才才才才才才』」

「！！！！！」

「」

それを聞いて楽しいのか、大御所はフフンと自分の髪を掬うようになでる。その双丘は丸くて、白くて、大きくて……。

でもこれは……。

「痴女！」

「なんで、アンタ平気なのよ！」

それに、と大御所は付け加え、

ニツコリとほほ笑んだ。

「ほら、昂子ちゃんも」

ぐああ！我ながら気持ち悪い声が出てしまった！くそ、穴があったら入りたい！

「さあ、通してもらおうよ？」

89

「あの、大御所、隠したら……？」

「えー、なんで？」

「いや、だって……」

すると大御所が突然顔を寄せて来た。よけようと思ったのが遅かったか、頭をがちり固定される。顔がどんどん近づいて来て、そして、極限の位置で額と額がぶつかる。周りから見れば、特に客席からは完全にキスしている様に見えるだろう。

そこで大御所が俺に言った言葉は、

「元が男だから恥ずかしくないんだよ、昂葉」

それだけ言って顔を離し、再び走り始める大御所。俺と手を繋いでいるから、それに引っ張られる。

ある程度進んで、妨害用のトラップを解き、また進む。その繰り返し。

前にはあと一グループしかない。

そこで、

「おおっと、トップの木崎・岸本ペア！ここで得意の格闘戦に持ち込むようです！」

司会の声が聞こえる。見ると、目の前のペアが反転してこちらに向かって来ていた。二人だけ体格が違う。

「男かな？」

「違うでしょ、女でしょ！」

アンタが拒否られたんだから、男が参加できる筈がない。

この二人は知っている。オリンピックの選手だ。種目は違っていた気がするが、仲が相当良いらしい。

どうやって迎え撃つか考えていると、謎の影が俺と大御所を抜かす。

セシリア嬢だ。

「そこで反転！」

後ろから鈴テールの声が聞こえる。振り向く間もなく、鈴テールが俺たちを抜かす。その姿は、飛んでいた。そして、その足でセシ

リア嬢の顔を蹴り飛ばし、巨人を超える。

そのまま鈴テールは中央島に入り、フラッグを手取る。

「勝ったあ！」

その礎にされたセシリア嬢は巨人のタックルを受けプールに落ち、俺達はその突進を二手に分かれて避ける。

「あーあ。負けちゃったね、昂子ちゃん」

「そうだね、痴女ちゃん」

可能な限り声のトーンを落として、未だにその美麗な胸を晒す大御所に言う。せめて手で隠してくれ。

そんな事を考えていると、セシリア嬢の落ちた所から大きな水柱が立つ。

そこから出て来たのは、ISに身を包んだセシリア嬢。

なんか色々鈴テールに言っているが、要は『わたくしを踏み台にした！』と言うことらしい。それに対して鈴テールもISを展開させる。司会のお姉さんや、客席が今までとは違う盛りあがり方を見せる。

「あらまあ大変」

「何悠長なことやってんだアンタ!？」

そして二機がぶつかり合う。まずい、このままではウォーターランドが破壊される! だからと言ってギター・ビートを展開したら、俺の正体が……。

「あ、決着がつくみたいよ」

「ッ! ピラビット!」

腕装甲を部分展開、六機の小型ビットを飛ばし、ぶつかり合う二機を丸々閉じ込めるようにシールドを張って覆う。

「な……」

「え……」

双方の最大にして全力の攻撃が、急に近い形の三角柱のシールド内でぶつかった。

もくもくと煙が立ちこめて中の様子が見えない中、大御所が突然

水に飛び込んだ。こっちはビットの六機同時制御で一杯になっているのに、なんて呑気な、

「おい、とったどー」

旗を持った大御所が、水面にその美貌を生え出だした。

……………なんて呑気な人なんだ。

結局、フラッグは大御所が勝ち取り、すなわち沖縄の旅を勝ち取った。

俺は遠慮して、大御所も「そんなに行きたくないから」と言っ
て例の巨人二人に譲渡した。この時鈴テールとセシリア嬢じゃ無かつたのは、あの二人がISで会場を破壊しかけたからだ。それを阻止したあの黄色いビットの正体は、誰にもわからないと言う。

まあみんなあの二人の戦闘に夢中だったから。

裸体を晒した大御所は、男たちに囲まれる前に元の性別へ戻って、俺もすぐにY f o r Xの対になっている薬『X f o r Y』を飲み込んで男に戻った。

あのままだったら一体どうなっていた事か……考えたくもない。

大御所の異世界人説は、真相を聞く前に本人がどこかへ消えてしまったから、聞けず終いだった。

だがいつかまた、しかも近いうちに必ず合うことになるだろう。

その時までには、聞かなくちゃならない事を纏めておく必要があるかな。

例えば、『渡りの悪魔』の本当の意味とか。

第九話「サマー・バケーション」(後書き)

そうして遅れた更新。

しかも性転換。

それも大御所。

それでもってポロリ。

場所が場所ならもっと過激に描写しちゃいました。

表現も生々しく。

実は官能小説も書けると言う所為で、「お前いかついな」と一部から言われます。

次はヒロインな女性がやっと登場したりしなかったり。

……ごめんなさい、登場します。

それと、ここはこうした方が、とか、この表現はこうだろう、とか言うアドバイス求みます。

第十話「パフォーマーズ・リスク」

午後のＩＳ実習に向けて、俺と一夏は現在アリーナのロッカールームに居る。いくらここが広いとはいえ男二人で密閉空間とは、男子高校生のデリケートな精神上あまりよろしい事態ではない。

夏休みが三日前に終わったこのＩＳ学園は女子が９９パーセントを占めている事から女っ気は足りているのだが、普段がそれなだけあって、いざ『男だけ』となった時にこのＲＰＧの毒的なジワジワとくるダメージが無視できない物となってしまうのだ。

……しかしどうもこれは俺だけらしく、一夏に言ったら真顔で「そんなことあるわけ無いだろ？」なんて言われてしまった。

「あー、シット。ちくしょう……」

急にだるくなって、前かがみに座りこむ。傍から見たら、体育座りチックに見えるだろう。

「どうしたんだ？ 昂葉」

「アイキャント。やっぱ無理だぜ、イチカ。こんな短い間でも女っ気がないと、禁断症状が出ちゃう」

「……なんか、いろいろ大変なんだな。それだったら速く着替えちまおうぜ。もうあまり時間がないし……っ！？」

なんか息をのんだ様な声が聞こえた。なんだよ、と小さく声に出しながら一夏の方を向いてみると、

「だーれだ？」

大人びたその声には楽しさや面白さが滲んでいて、子供の様な印象を受ける。

その声の持ち主である女子は、一夏の後ろに立っていてそいつに目隠しをしている。リボンの色から上級生である事が伺えるその人はべっぴんさんで、大御所美女 *ver* とは違うゆったりとした雰囲気を出している。

だーれだ、って言う事は一夏の知り合いなのだろうか。クソ羨ま

しい。

「はい、時間切れ」

俺が見惚れてる間に時間切れと言われてしまうほどの時間が経っていたのか、俺の見知らぬ女子がそんな事を言いながら一夏から手を離す。

ここで自然な動きで振り返った一夏は、必ずその女子の名を言うだろう。耳を立ててその名をいざ刻もうと、

「誰？」

「ヘイ！ワッターフ○ッ○ンボーイ！」

なんで知らないんだよ。思わず体育座りしたまま汚い言葉を放ちまたじゃないか。つうかそれだと、さっきのやり取りは成り立たないんじゃないか……。

対して女性はどこから取り出した扇子を口元に当て、これまた魅力的な笑みを浮かべている。

「あの、あなたは――」

「あっ」

女子の視線が俺と一夏の後ろを見たので、つられて俺達もそちらを見る。

「引っかったなあ♪」

視線を戻すと、一夏の頬が女子の扇子で押されていた。場所を代われよ。あと首が痛くなってきた。

「……えーと」

「それじゃあね。キミたちも急がないと、織斑先生に怒られるよ」「え？」

言われて時計を見て見ると、かなり厳しい時間になっていた。

「なん、だと……」

「お、おとおおい！昂葉、急げ！」

慌てて服を脱ぎ出す一夏をよそにさっきまで女子がいた方を見ると、そこには既に誰もいない。俺に気付かれずに離脱するとは……。

「おい！」

「イチカ。アイヲズボーンオブマイアイエス……」

ズボンを脱ぎ出した一夏が、腕をクロスしながら呪文を唱える俺を無視しながら露出狂の如く脱衣を続ける。

「ソウ、アイワズプレイ……インフィニット・ストラトス!!」

ぺかーっと体が粒子に包まれる。そしてそれが固形化していき、更衣室に現れたのは、

「……IS?」

「イチカ。裏ワザってのは、重要だぜ」

そんでもってIS解除。ISスーツを着た俺がロッカールームに降り立つ。

「……ハッ！おまえ……！」

「SARABADA、イチカ」

ISスーツ未着の展開はエネルギーを大量に消費する。が、しかし！メイドオブ大御所なコイツはそんな事には縛られない。スーツ未着の展開でもエネルギーは消費されない。これがギター・ビートの唯一の長所だと思う。

卑怯者だとか何だとか後ろから聞こえたが、気にせずアリーナへと躍り出る。

さあ、サンシャイーン！（女子とは太陽である）

「遅刻とは頂けないなー。イチカ・オリムーラ？」

「昂葉、お前ってやつは……」

集合時間に遅れて来た一夏は、織斑先生のお怒りを買われた。遅れて来た訳を一夏が説明したのをまとめると、「見知らぬ女子が現れてその相手をしている間に時間が経ってしまった」と言うことになった。もちろんそんな事を誰も信じる筈が無く、最終審判が下されようとした時、一夏が弁護人を選んだのが俺だ。

だから俺はこう答えてやったのサ。

『イチカ。おいはそんなもの見て無いぞ』ってな。

H A H A H A！コーバ、おめえってやっぱ最高だぜ！

フッ、やめろって。

「それでは、次は白砂崎と織斑だ。二人とも準備につけ」

「はい」

因みに一夏はあの後、怨敵を見る目で俺を睨みながら、シャルル君にハチの巣にされた。カワイソーニ。

俺と一夏は背を向けあって、それぞれ別のピットに向かう。

アリーナの中ではクラスの女子……っていうか専用機持ちが、国の誇りをかけたガチバトルを繰り広げている。俺と一夏はそんなものは無いから、幾分かゆっくりしているのだけれど。

……代表？

いまさら俺が言うのも何だが、IS学園は国の推薦がないと転入が出来ない。だとしたら、俺は一体どこの所属なんだ？ なに、悪魔帝国とか？ いやいや、ダサいだろうそれは。

首を傾げながら薄暗いピットに入り、一人ギター・ビートを展開する。コンソールを呼び出して本体と武装を大まかにチェックした後、外の様子が映し出されているパネルを見る。

後もう二分はかかるだろう。

暇つぶしをしようと思ったが、特に何もすることがない。チェックをするのもなんだか気分が乗らないし、なによりさっきやったし。ギター・ビート本体を振り返ってみようか。

まず機体色は黄色。

スラスターは他のISとは少し変わった形をしていて、細長く、チャッカマンの様な形をしている。本当にチャッカマンでたとえるならば、取っ手の部分が黄色で、発火の煙突部が黒に染められている。その黒の部位に機関銃の冷却穴の様な穴があいている形になっている。黄色い部位にはアンプが偶数個付いている。そんなものが三つ背部に背部に浮いている訳だ。

装甲は少なすぎ多すぎずの、いたって平均的な厚さ。

攻撃力も普通。

速度に若干の強みがあるだけで、後は何もかも普通。第三世代の特殊兵器を積んでいる訳じゃないから、多分第二世代。

ついでに言うとかイツの製作者である大御所は、昔世界一の科学者だったらしい。

.....。

世界一の科学者が、なに個性の無い物作ってるんだよ。特記事項スラスターしか無いじゃん！

他の見てみなよ。

一夏の白式Ⅱスピード、攻撃特化型。

セシリア嬢の青雫Ⅱスピード、遠距離射撃特化型一対多白兵戦仕様機。

鈴テールの甲龍Ⅱ中距離仕様、長期戦安定型。

シャルル君の疾風Ⅱ大容量収納領域、変則戦闘型。

ラウラ少佐の黒雨Ⅱ多方面自由変則戦闘型。

箒頭首の紅椿Ⅱ近距離傾向、多目的万能型。

んでもって、

コーバの奏者Ⅱ.....ま、マルチ？

おいおいおい、大御所さんマジパねえス。

『次は白砂崎君と織斑君。出て来て下さい』

突然、山田先生の声が聞こえた。ピット・ゲートが開くと、シュヴァルツェア・レーゲンもというラウラ少佐がちょうど入って来る。

「お疲れさん」

「あ、ああ.....」

声をかけると、ラウラ少佐がぎこちないながらも返事を返してくれた。一番コミュニケーションが取りづらそうだったこの人も、夏休みに一夏の家でゲームをして以来、挨拶程度は交わすようになった。あの日は、色々と凄かった.....。

少佐と入れ替わりにゲート前に立ち、そのまま勢い任せに飛ぶ。薄暗いピットから一転、明るい昼の光が俺の目を潰そうとしたが、

ギター・ビートの補助でそんな事は無く無事に一夏と対面を果たす。

「Ah Han? 来いよイチカ。返り討ちにしてやる」

「それはこっちの台詞だぜ、昂葉」

俺の手にはクレイジー・ガトリングTwinsが現れ、一夏は雪羅を左手に、雪片を右手に構える。

さて、どちらが勝つであろうか。

「じつつだんへーきはよっけらあれなーい!!」

「くう……!」

ピラビットを飛ばして六方面からの同時射撃をしながら、気の狂った向きに四つの銃口があるクレイジー・ガトリングTwins二丁を撃ちまくる。エネルギー弾のピラビットは防げて、合計八門の射線からはそう簡単には避けられない。

一夏も中々のスピードで避けてはいるものの、数発は当たっている。これは時間の問題だ。もう二分もすれば、一夏のシールドエネルギーはゼロに……なに？

「うおおおおッ!!」

「ちよ、おま、ばっかじゃ……!!」

真正面から突っ込んできやがった! しかも早い!

防御は不可。ならば回避。スラスターを強引に右へ向け、噴射させる。これで……っ!

「アレンジ!」

「ちい……!」

美術品の様な刀を即時展開、ガキイイインッ!!と言うまさしく金を切るような音をだしながらも、一夏の雪片を寸での所で受け止める。まさかあの体勢から瞬時加速をするなんて、誰も予想できないだろう。おかげで一夏の体勢は不安定だが、俺もとっさの反射の所為で次のモーションを出し辛い形になっている。

でも。

「くっ……なッ！」

ダンッ、ダンッと一夏の背中にエネルギー弾が数発命中する。

左手の雪羅を、後方からの攻撃に対処できる位置へ一夏が持つて行こうとすると、当然のように隙が出来る。雪片の押しが弱くなり、行動の選択肢が一気に増える。

「油断しすぎだな、イチカアアアッ!!」

「う!?!あ、しまっ……」

遅い!

上段に構える形に引いたアレンジを、天井のシールドスレスレまで伸ばす。使用者には何故か質量が増えたようには感じないこの妖刀は、敵には見た目の通りの威力を見舞ってくれる必殺の剣。

それを、容赦無く振り下ろす。

とっさに雪片と雪羅を頭上に掲げる一夏だが、それは結局無駄なあがきだ。

裏ワザとは、やはり大切なものだな。

——ターボスラスター三基の接続を解除。独立マニュアルに移行。

——スイヒョウガ・アレンジの粒子格接続領域をオープン。規格内の他武装との一時ドッキングを容認します。

、ツッキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
ン!!!!

アレンジと雪片が交わる。かしなるほど、やはり一夏は持ちこたえて見せている。

だがどうだろう。これから0.2秒後には、その顔は困惑に染められたものになるだろう。

フッ……とターボスラスターが消失、と同時にアレンジの峰に消えた三基が間隔を開けて現れる。

そして、火を噴く。

「うおおおるおおおおおおおおッ!!」

ガクン!と、手に伝わった消失の衝撃を合図に、アレンジはアリナの地面に深く刺さりながら一夏と白式も地に叩きつける。

砂ぼこりの立ちこめる白式の墜落地点には、見えずともそこにクレーターが作られた事が分かる。我ながら、相当な威力だ。そうして、スピーカーから聞こえる電子音で今回の勝負が決定された。

「朝礼なんて、この学校には似合わない。私は拒絶するぜ」

「なんだよ、それ。今日の朝礼は今月の中程にやる学園祭についてだったよな」

「イチカは情報通だな。おいはそんなの良く知らねーから、実際に朝礼が始まるまで内容が分からないんだよ」

男二人並んで、周りは全員女子だ。とても姦しい。

しかし、なんだ。女がいないと発狂しそうになるが、今度は今度でなんか、内側からどす黒い物が……。

要するに、ムラムラするのだ。やはり最近、なにか体の様子がおかしい気がする。

「それにしてもあの剣、物理ブレードだろ？なんで伸びるんだ？」

「しーらね。アイドンノウだぜ、イチカ」

「おまえ、自分の武器なのに……」

そりゃあ俺だって大御所に聞いたさ。そしたらあの人非人、『元は大きくなる刀だったんだよ』とか言って、それはそれは殴り倒したい気持ちでいっぱいになりましたとも。

と、生徒会の役員が会長からの挨拶を宣言する。

会長、IS学園の会長。

やはり美人なのか！？

「やあみんな。おはよう」

美人だった。

見覚えのある顔に、隣で絶句している一夏の肘をつつく。

「なあ、イチカ。あれって……」

「俺たちが、ロッカールームで会った人だ……」

実は生徒会長だと分かった例の美女。一夏とコーバの運命やいか
に……!!

なんて壮絶な展開は特になく、その女性の名は更識盾無というらしい事が分かった。名前がいかつい。

そして相当な遊び人なのか、今回の学園祭に新ルールを導入することを決めたいらしい。

どれどれ、ギター・ビートさん。かるーく、未来の事おしえてちょ。

——ヴン……。

人知れず一部機能が解放され、俺に新しい世界を見せてくれるG
B。流石は愛機。普段少しばかり貶してはいるものの、俺の思いには
ちやっかり答えてくれる。

「……なんと!」

「……昂葉、大丈夫か?」

「その言葉、五秒後のお前にそっくりそのまま返そう」

「五秒後?」

然り!

と、会長の後ろにディスプレイが表れる。空間投影式か。そして
そこに書いてある文字こそ、ギター・ビートが俺に見せてくれたもの。
すなわち、

「『各部対抗織斑一夏&白砂崎昂葉争奪戦』!」

その声に、女子の喧騒がけたたましく響く。耳が潰れるかと思
いましたぞよ。

「五秒後って……こういう……」

「……イチカ、大丈夫か?」

ポンポン、と背中を軽く叩いてやる。

「自分に自信を持て、ボーイ。俺なんて、見てみろよ。オマケ臭が
漂ってるぜ?」

とりあえずって感じがしてならないぜ。

愕然とする一夏と、何故か哀しい気持ちになる俺をよそに、女子

だらけの学園祭は盛り上がって行くのだった。

「メイド喫茶はどうだ」

その日の放課後。特別ホームルームでクラスごとの出し物を決めるため皆が各々の意見を言う中、そう言ったのはみんなびっくりラウラ少佐だった。

まさか、あんな堅物がこんな事を言うとは。

「え、えーと……みんなはどう思う？」

意外な事にクラス委員長だった一夏が呼びかける。

意外にも、ウケが今一だ。思った以上に女子群が沸かない。

「いいんじゃないかな？」

そこでこの空気の中一体どんな覚悟で切り出したか、シャルル君がラウラ少佐の援護射撃を開始する。

「一夏と白砂崎君には執事か厨房を担当してもらえばオーケーだよ
ね」

この人、機転がきくな……良いお嫁さんになれるな。一夏が羨ましいぜ。

「織斑君、執事！ いい！」

「厨房に立つ白砂崎君も見たいかも！」 ありがとう。

「それでそれで！」

「メイド服はどうする！？」

火が点いたか。さっきと打って変わって、想像以上の盛り上がりを見せてくれている。

「メイド服ならツテがある」

またしてもラウラ少佐が声をあげる。クラスの大半が目丸くしているのに気付いたか、ラウラ少佐が咳払いをする。

「――ごほん。シャルロットが、な」

注目されるのが照れくさかったのか、ラウラ少佐は少し顔を赤らめている。なんかもう、可愛いなあちくしょう。ランジェリーラウ

ラちゃんに呼び名を戻そうかしら。

ともあれ、クラスの出し物が無事に決まった。

「うーむ……」

自室でギター・ビートのスペックを確認する。

一夏は戻ってきていない。

『千冬ねえに報告しないといけないからな』とか言って教室で別れたきりだ。

まあそれはそうと、今の俺にとって問題なのはギター・ビートの性能のただそれのみ。

今日知ったが、ISはエネルギー配分を調整する事である程度性能が変化するらしい。大御所め、なぜ俺に教えなんだ。

ならば早速俺好みの高速戦闘型にしてやろうと、いじり始めたわけだが……。

「あんの、人非人……」

ISにあるエネルギーを100とした時、速度・攻撃・防御にそれぞれ適量が振り分けられる。ギター・ビートには順に、33・34・33と振り分けられている。

だが。

再振り分けが不可能になっている。

普通は10くらい動かしても良いもののに、なぜコイツだけ？そんなの、製作者の頭が狂っているからでしょうに。

「クソッ！ 攻撃が低いからって、こっちは今のところスイヒョウガを主にした戦術しか練れないんだぞ」

今は大丈夫でも、そのうち……早いうちに攻撃パターンが完全に読まれるようになってしまう。

元々の攻撃力がスイヒョウガ・アレンジを上回るものはあるが、アレンジは長大化による攻撃力倍化があるから、決まればギター・ビートでも相手を一撃で沈める事が出来る。

「うーむ……次の実戦授業で単一仕様、使ってみようか……」

小さくつぶやきながら、それに関するデータを新たに宙に開く。

『Ma★sRock』。複雑怪奇なこの表記は、マスターズロックと読むらしい。大御所に半ギレで聞いたら答えてくれた。

誰だってそうだろう。単一仕様が出たと思ったら早速「ま、ま……ほし？　えす、ロック……??」状態に陥いっちゃって。訝しみながら大御所を見てみれば、どや顔で笑っているし。

そしてそんな俺の単一仕様の能力こそが、

「ただいま……」

「あり、イチカ」

なんと。我がルームメイトであるエロゲ補正全開のクラスメイト、織斑一夏が帰って来た。ギター・ビートのコンソールを閉じながら時計に目をやると、なるほど外がすっかり暗くなってるわけだ。

「ずいぶんとスロウリイな御帰宅で」

「ああ……色々あって」

言いながら、一夏は自分のベッドに雪崩れこむ。

飯は？　もう食べた。

どこで何をしていたのか。そう聞こうと思ったが、よほど疲れていたのか。簡単なやり取りをして、ルームメイトは眠りに落ちた。

ガチャ。

一夏が夜遊びして帰った日から二日経った某時。

部屋のドアが開いたのを感じる。

「……誰」

たったたった、と軽快になる足音に、一夏ではない誰かが入って来たのだと悟る。ベッドから玄関を遮るように角を張る壁に、注意を注ぐ。

大御所の訓練で身についてしまった癖で、ISの装備をいつでも展開できるように脳内を区分する。

そんな完全警戒の中、現れたのは

「会長？」

「おや。キミは一夏君のルームメイトの」

「白砂崎おうば……昂葉っす」しまった囁んだ。

入って来たのは、大御所と肩を並べられそうな程の遊び人にして
I S 学園の生徒会長、更識盾無さんその人だ。

本来俺は十七歳で、『恐るべき大御所計画』によって一年生をもう一回やっている形になっているわけだが、実際は同級生なこの人にも敬語を使おうと思う。

だがこの人、何をしに来たんだろうか。

様子から察するに、俺ではなく一夏に用があって来たらしいが。

「イチカはゴーアウェイっすよ？」

「うん。知ってるよ。でもキミがいて良かった。少しばかり手伝ってもらいたい事があるんだけど、良いかな」

相手に任意を求める要求なのに、どこか有無を言わせない感が伝わって来る。そんな会長の肢体に、知らずの内に見入ってしまう。

制服の上からでも分かる、豊満な胸。

アイドル顔負けの、キュッとしたくびれ。

セクシーさを加速させる、良い形のヒップ。

——ズツ……。

『

』

「どうかした？」

「……え、あ、いや！ 別に……」

「そう」

なんだ、今のは。

心臓の中心から沸き出すような、いや、噴き出すようなどす黒い感情。血が沸騰し、目の奥で神経が焼け落ち、灰が破裂したかのよ

もう」

「もう、ね。はいこれ。これはあっちね」

指示された通りの場所に置き、戻り、また指示と荷物を受け取って置く。

会長の指示の声以外、言葉はなかった。

機械的な作業はほどなくして終わり、俺は必要最低限の荷物をバッグに詰め込みはじめる。この学園は広い。少し歩けば、寝れる場所などごまんと見つかるだろう。

「要請すれば、他の女子と相部屋になることもできるけど？」

「遠慮させていただきます。では、俺はこれで」

一通り荷物を詰め込んで、部屋を後にする。

別に更識会長に怒っているんじゃない。

じゃあ何に感情を燃やしている。

大御所か？ 違うだろう。

ならば俺自身？ 何を馬鹿な。

じゃあ何に感情を燃やしている。

知らない。

俺は何も知らない。

——ある女の顔が脳裏に浮かぶ。

誰だこの女は！

知らない。

俺は、何も、後悔すらも……！！

「……………な、ぜ……………」

目玉が枯れる、昂葉はそう思った。

「うそ……………」

長い、一房のポニーテール。篠ノ之箒とはどこか違う気がするが、今はその微細な誤差に彼は気付けない。

この日は学園祭当日。学園外からの客もあり、生徒一人が入場券を一枚自分の友人に渡す事で、学園に進入する事が出来る。よって、今日は最高で学園に在籍する生徒数の二倍の数の人間があふれる事が可能になるわけだ。

昂葉が誰にも渡していないので、完全なる二倍の夢は砕け散ったが。

時に、彼は喫茶の仕事に休憩を貰い、学園をブラブラしていた。メイド喫茶は思った以上に繁盛していて、すぐに戻る事になるだろうと予想し、昂葉は現在メイド喫茶の男子衣装こと執事服でいる。

彼は果たして、白い髪に黄色のバンダナ、そして執事服というギヤップに満ち溢れたその姿が周囲の女子の目を集めて止まない事に気付いているだろうか。

いや、やはり気付いていないだろう。眉を寄せたしかめっ面が、その事を証明してくれている。

（ちくしょう！ちくしょうッ！）

心の中で何度も叫ぶ。現実には声に出して言っていたら、喉がやぶれる程のダメージを受ける音量と回数を、彼は心中で叫ぶ。

その理由は。

（声が、止まない……！！）

更識盾無を見た時に沸いて出た、あの感情。あの声。

それが、昨日からまるで止まなくなっていた。

クラスの出し物に影響が出ないよう、昂葉はわざと太陽の方を向き、その光のせいではかめっ面になっているんだと周囲に錯覚を起こさせる。

目が焼けて、乾いて来た。

心も乾く。

学園に響く喧騒よりも鮮明に、耳もとで訴える声が表わすことの

それを誇張するかのよう。

『喰らえ。泣かせろ。奴らは欲している。その為にいる。だから、犯せ』

巫山戯ていた。

これは自分のものではない。

なのに自分の内から聞こえてくるとは、一体どんな道理だ。

昂葉は、生涯消える事はないだろうと、見る人を心配にさせる程眉間にしわを寄せる。

——ズッ……。

また来た。

心臓から噴き出すソレは腹に溜まって行き、体を重くする。

誰か。

誰か。

これの止め方を、教えてはくれないだろうか。

歯を食いしばり、昂葉は心中でそう懇願する。

その時だった。

「——こうば……？」

冷水をかけられたようだった。

もうすぐ沸点に達するのではないかと、そう思わせる程に熱くなっていた昂葉の精神と身体に冷水をかけたのは、一人の少女だ。

陽光を睨む目を、声のした方にずらして行く。

ポニーテールの髪が印象的だ。

——昔から、お前はその髪型が気に入っていた。

明るい水色を基調にした服を着て。

——お前は明るく、活発な女だからな。

普段は明るいと言う事が見て取れるその顔は、驚愕を表している。

——違うだろう。お前は笑っていた方が可愛い。

白砂崎昂葉は彼女の全てを知っていた。

彼女は白砂崎昂葉に全てを委ねていた。

「光夜……？」

みつよ。そう昂葉は問う。

「昂葉……」

こうば。そう光夜は繰り返す。

時間はこの二人を置き去りにして、先へと進む。

時間を失くした二人は、ただ見つめ合うのみだった。

第十話「パフォーマーズ・リスク」(後書き)

「そうだ。軽く一夏と昂葉を闘わせよう」

「その前に会長出さなあかん」

「うぬう。クラスの出し物の下り、入れた方が良いよな……」

「ああ。会長、昂葉を追いだすの巻、入れなくちゃだめだなあ」

「あれの伏線、最初に入れるの忘れてたあ！」

「この子、名前なににしよう……」

「大御所は……出さないでおこうつと」

かくあり、遅れた所存にございます。

確認の試し読みはしていないので、ここまで来るのに不可解な表現や誤字がたくさんあったのだと察しましょう……。

電撃大賞、近いですね。私と同じく、狙っている人もいるでしょう。そちらさんはもう応募されましたでしょうか。自分は……まだ半分も書いてません。二次選考どころじゃ無くなってきました……。

邪道主人公が特異な自分ですが、あえてヒーローもので挑んでみます。だからでしょうか。全く進みません。

この事もあり、次回の更新もまた送れるでしょうか……まあ、その、はい。読んでくれてありがとうございます(?)。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7384p/>

IS（インフィニット・ストラトス）～激奏のイエローパフォーマー～

2011年2月24日04時10分発行